第１章●子どもと勉強

目黒区立菅刈小学校教諭
土橋　稔

はじめに

ここ数年間、書店には多くの教育関係の雑誌がならび、また学習塾へ通う子どもの姿はすっかりなじみ深いものとなった。親も子どもたちも勉強についての関心は高く、小学生の私立中学入学熱は、増大の一途をたどっている。また教師もまじめに学習指導に取り組み、その結果として、日本の小学生の学力は世界でもトップレベルだという。

しかし、一方で、詰め込み教育が批判され、知識は豊富だし、計算は早いが、考える力が不足しているとの声もきかれる。

いずれにしても、小・中学校9年間、さらに高校・大学へと続く学校生活の第一歩。この中で基礎的な力が形成されるのである。この時期、子どもたちにどのような力をつけていかなければならないのか、子どもたちの勉強をとりまくさまざまな要因について探っていきたいと思う。

なお、これまで『モノグラフ・小学生ナウ』でとりあげた子どもと勉強に関するレポートは、以下に記す16冊である。

vol. 1－1　家庭学習について
vol. 1－8　子どもとスポーツ
vol. 2－5　子どもにとっての学級
vol. 3－3　学業成績
vol. 3－7　家庭学習（その2）
vol. 3－9　子どもの求める教師像
vol. 4－8　学習塾
vol. 4－12　お母さんの教育観
vol. 5－6　教科（社会科）
vol. 5－11　教科（算数）
vol. 6－3　教師の生活と意見
vol. 7－7　通知表1
vol. 7－8　通知表2
vol. 7－9　音楽
vol. 8－5　学習塾
vol. 8－7　授業

1. 教科間の意識をめぐって

子どもたちの学校生活の中心はなんといっても「授業」である。調査対象である小学校高学年では、1日平均5時間、算数、国語など8教科に、道徳、特別活動を含め、さまざまな授業をうけることとなる。子どもたちの生活時間の大半を占めるこの授業、子どもたちはどんな気持ちで教室の机に向かっているのであろうか。

授業に向かう気持ち

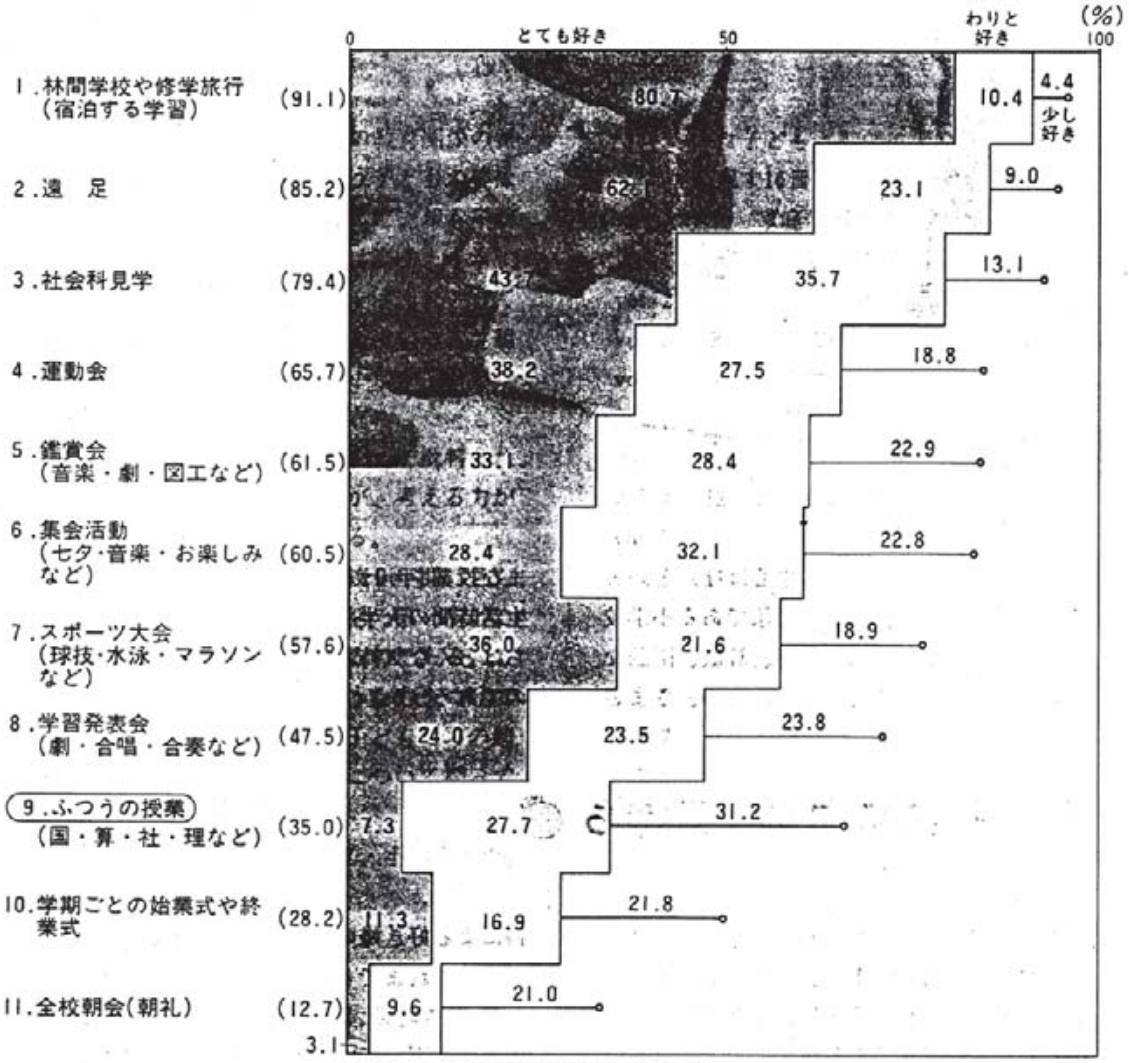
まず、学校生活における授業の位置づけをしておこう。図1－1は、学校生活におけるさまざまな行事や儀式・集会などの特別活動がどのくらい好きであるかを、子どもたちにたずねたものである。「授業」は全体の9位。「少し好き」までを含めると7割近くに達するが、「とても好き」と答えた子はわずかに7％で、現実的にはあまり好かれていないといえよう。

そんな気持ちも教科により違ってくる。教科による好き嫌いを示したものが表1－1である。これまで4回、同様な調査が行われている。調査時期、調査対象が異なるので、数値は若干上下しているものの、どの調査でも、好きな教科の順序はほぼ同様である。子どもたちの一番好きな教科は体育が断然トップであり、以下、図工、家庭と、いわゆる芸能教科とよばれるものが上位を占める。一方、主要教科については不人気であり、国語はどの調査でも最下位である。つまり、作業・活動

の要素の高い教科の人気が高く、知識・理解に終始するような思考中心の教科が嫌われているといえよう。

さらに、各教科に対するイメージをみたものが**表1－2**である。全体的には、国語や算数などの主要教科への強いこだわりの意識が目立つ結果である。その中でもとくに算数は、小学校における教科の王様という感があり、先生はとても熱心に教え、成績がよいと一番うれしく、おとなになっても一番役に立つ教科と思われている割合が高い。

図1－1　行事・儀式・特別活動などの好き嫌い



（　）内の数値は「とても＋わりと」好きの割合

（vol.8－7「授業」より）

表1－1　教科の好き嫌い

(%)

vol. No. / 教科	vol. 5－6 教科「社会科」	vol. 5－11 教科「算数」	vol. 7－9 音楽	vol. 8－7 授業
調査対象	6年生 1,965名	5・6年生 1,234名	5・6年生 1,173名	5・6年生 836名
体育	① 67.1	① 76.1	① 73.9	① 71.6
図工	③ 48.0	② 67.3	② 70.2	② 59.2
家庭	② 49.0	③ 49.5	③ 60.5	③ 45.7
音楽	⑤ 33.9	④ 45.0	④ 47.8	⑤ 41.8
理科	④ 40.3	⑤ 43.8	⑤ 46.3	④ 43.0
算数	⑦ 29.9	⑥ 42.9	⑥ 36.0	⑥ 36.5
社会	⑥ 33.6	⑦ 36.4	⑦ 33.1	⑦ 29.2
国語	⑧ 18.6	⑧ 30.2	⑧ 27.6	⑧ 28.9

とても好き 1 ― 2 かなり好き ― 3 やや好き ― 4 やや嫌い ― 5 かなり嫌い ― 6 とても嫌い

1・2 ％

（上記した、4つの号より作成）

表1－2　教科イメージ

(%)

	国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育
一番得意な教科	9.3	9.0	18.5	6.3	11.1	13.5	4.1	28.2
一番苦手な教科	10.8	20.3	25.0	6.7	12.7	6.4	9.6	8.5
おとなになって一番役に立つ教科	24.3	22.3	32.8	1.7	1.1	0.8	14.1	2.9
成績がよいと一番うれしい教科	17.2	10.8	46.3	3.1	5.9	4.0	2.6	10.1
先生が一番熱心に教えてくれる教科	17.6	12.4	49.0	6.6	3.5	2.1	2.7	6.1
授業中一番楽しい教科	4.0	6.7	8.7	7.9	8.3	23.8	6.0	34.6

◯印は、20%以上の教科につけた。
（〰〰印は、10%以上の教科）

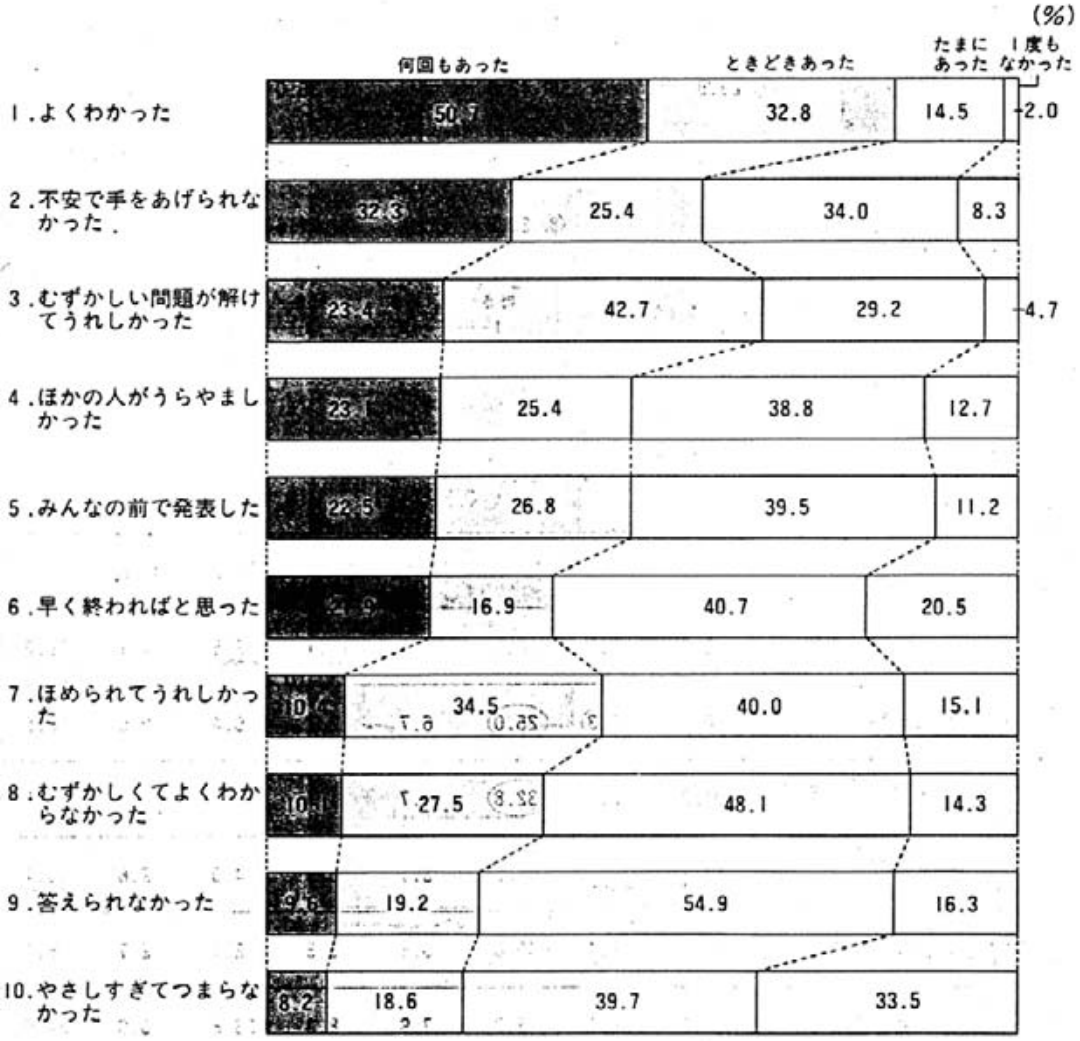
（vol. 8－7「授業」より）

教科「算数」

子どもたちの心の中に大きなウエイトを占めている算数。表1－2に示されたように、一番できるようになりたいが、それだけに不得意と感じている子も多いというジレンマ。そんな算数についてレポートしたものがvol.5－11「教科(算数)」である。

算数の授業中の子どもたちは、豊かな発想をもち、生き生きと課題に取り組む子から、いつも不安そうに答える子まで、さまざまであり、個人の学力差の大きい教科である。ま

図1－2　授業中の気持ち(算数)



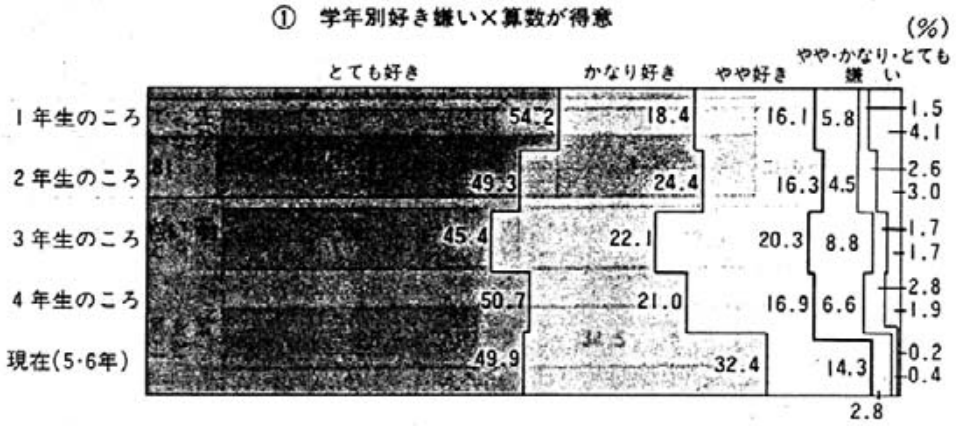
(vol.5－11「教科(算数)」より)

ず図1－2では、授業中の気持ちをたずねた。「よくわかった」こともあり、「むずかしい問題を解いたうれしさ」も体験し、「みんなの前で発表した」と、わりと多くの子どもたちが充実感を味わっている一方で、「不安で手があがらない」「よくわからない」などマイナスな気持ちも味わっている。この体験の度合いが、算数が好きな子と嫌いな子では、かなりの差があり、これらの授業中の体験を通し、算数の好き嫌いが形成されていくといえる。それと共に、算数は「できる」「できない」のはっきりしている教科である。それだけに、子どもたちは得意・不得意をかなり強く感じている。それももちろん算数の好き嫌いの大きな要因である。

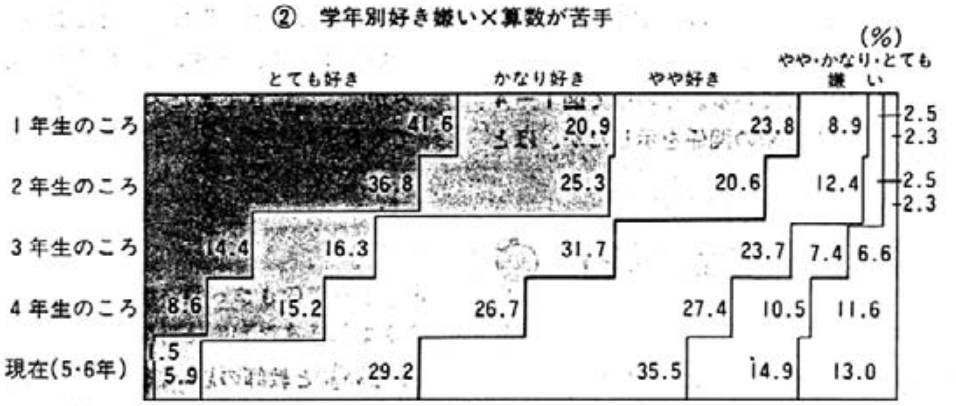
では、いつごろから得意・苦手意識をもつのだろうか。図1－3からは、小学校3年生を境にして、得意な子は自信をもって取り組み算数がさらに好きになり、苦手な子は極端に嫌いになっていくという図式が読み取れる。

図1－3　学年別好き嫌い×算数が得意・苦手

① 学年別好き嫌い×算数が得意

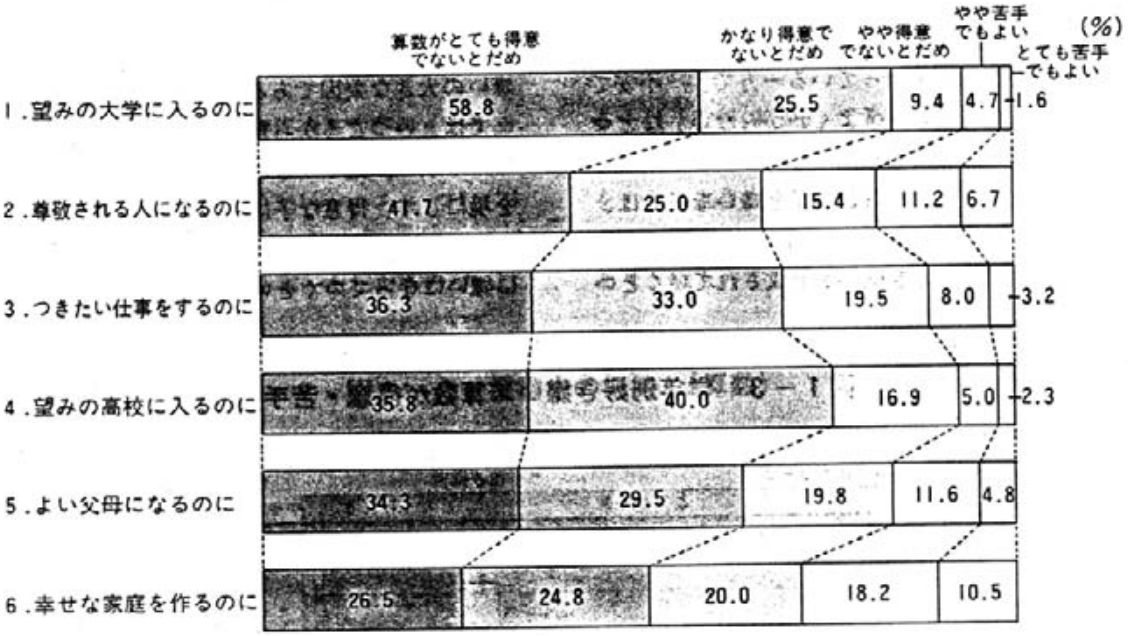


② 学年別好き嫌い×算数が苦手



(vol.5－11「教科(算数)」より)

図１－４　算数の成績と将来の関係



(vol.5－11「教科(算数)」より)

算数の学習の中で大きな転機が、小学校３年生の学習内容に含まれているといえよう。

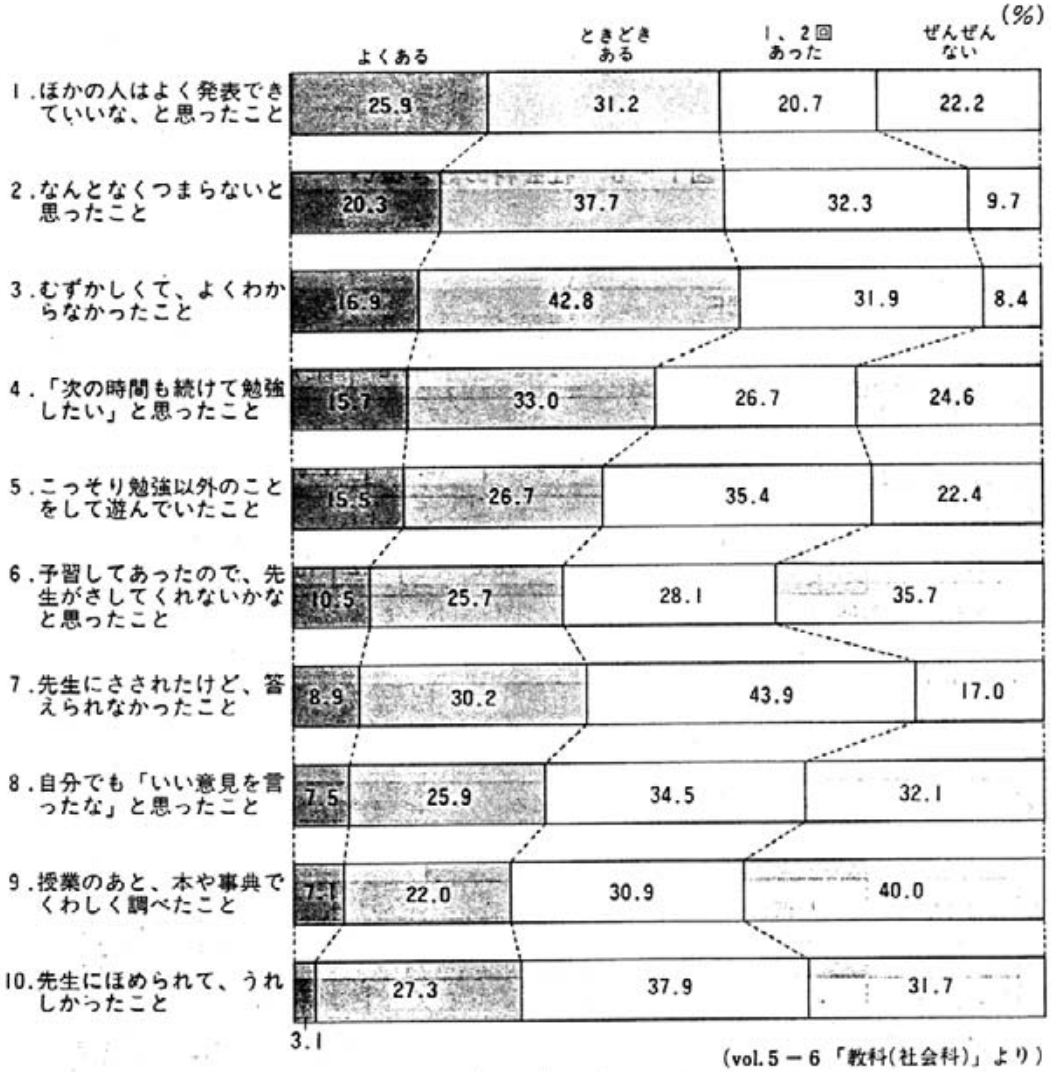
そしてこの算数の「できる」「できない」は、学校生活の楽しさや、子どもたちの自尊感情にまで大きく影響している。その中で図１－４に算数の成績と将来の関係を示したが、ほとんどの項目で算数が得意でないとだめだと答えている。よい父母になるためにも、幸せな家庭を作るにも、算数が得意でないとだめだというように、冒頭で述べた算数の存在の重みが、ここにきてまたズッシリとのしかかってくる。

教科「社会科」

社会科は、戦後の教育改革の中で誕生した新しい教科である。誕生以来40年の年月を経たことになるが、その間しばしば論議の的となった。そして今回の指導要領の改訂では、１、２年生の社会科は理科と共に生活科に変わる。そして、教育現場では「何をどう教えていいかわからない」「社会科の指導はむずかしい」と教師の思い悩む声がしばしば聞かれる教科である。そんな社会科に対し、子どもたちの授業への取り組み方をみたものがvol.５－６「教科（社会科）」である。

前述した通り、社会科は子どもにあまり人気がない。８教科中７位である。なぜ人気がないのであろうか。図１－５は授業を受けて

図1－5　社会科の授業中の気持ち



(vol.5－6「教科(社会科)」より)

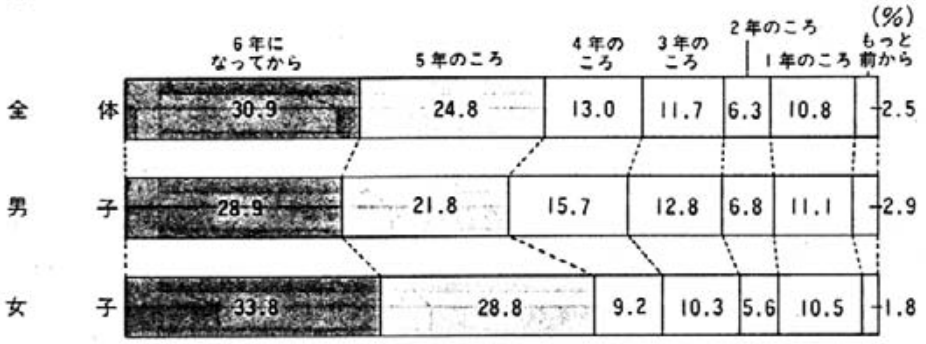
いるときの心理状態を探ったものである。明暗各5項目、計10項目が掲げてある。「よくある」「ときどきある」気持ちは、上位3項目がマイナスイメージである。「発表できない」「つまらない」「むずかしい」という気持ちが続く。そして逆に、「先生にほめられた」「授業のあとも自分で調べた」など子どもたちが学習に意欲的になっていくための条件が「ぜんぜんない」とする子どもが3割から4割にものぼる。このように子どもたちの興味や関心をかきたてられないところに、社会科不人気の原因があるようだ。

それでは、いつごろから社会科の好き嫌いが生まれてきたのであろうか。図1－6が示す通り、5年生以降に社会科を好きになった子が56%、逆に嫌いになった子が60%もいる。5～6年生の学習が好き嫌いの分化の速度を速める結果になっている。

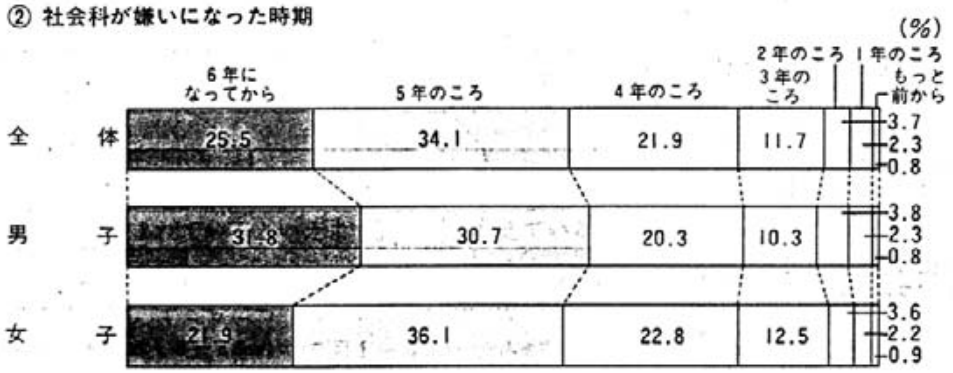
しかし社会科の学習には、大切さも感じており、内容別に将来役に立つかをたずねた図1－7では、「政治のしくみをおぼえる」を筆頭に、どの項目もそれなりに役立つと感じている。子どもたちの胸の中のこうした思いを大切にし、楽しく子どもたちが学習に取り組めるような教材の開発を含めた教材研究が望まれる。

図1－6　社会科の好き嫌い

① 社会科が好きになった時期

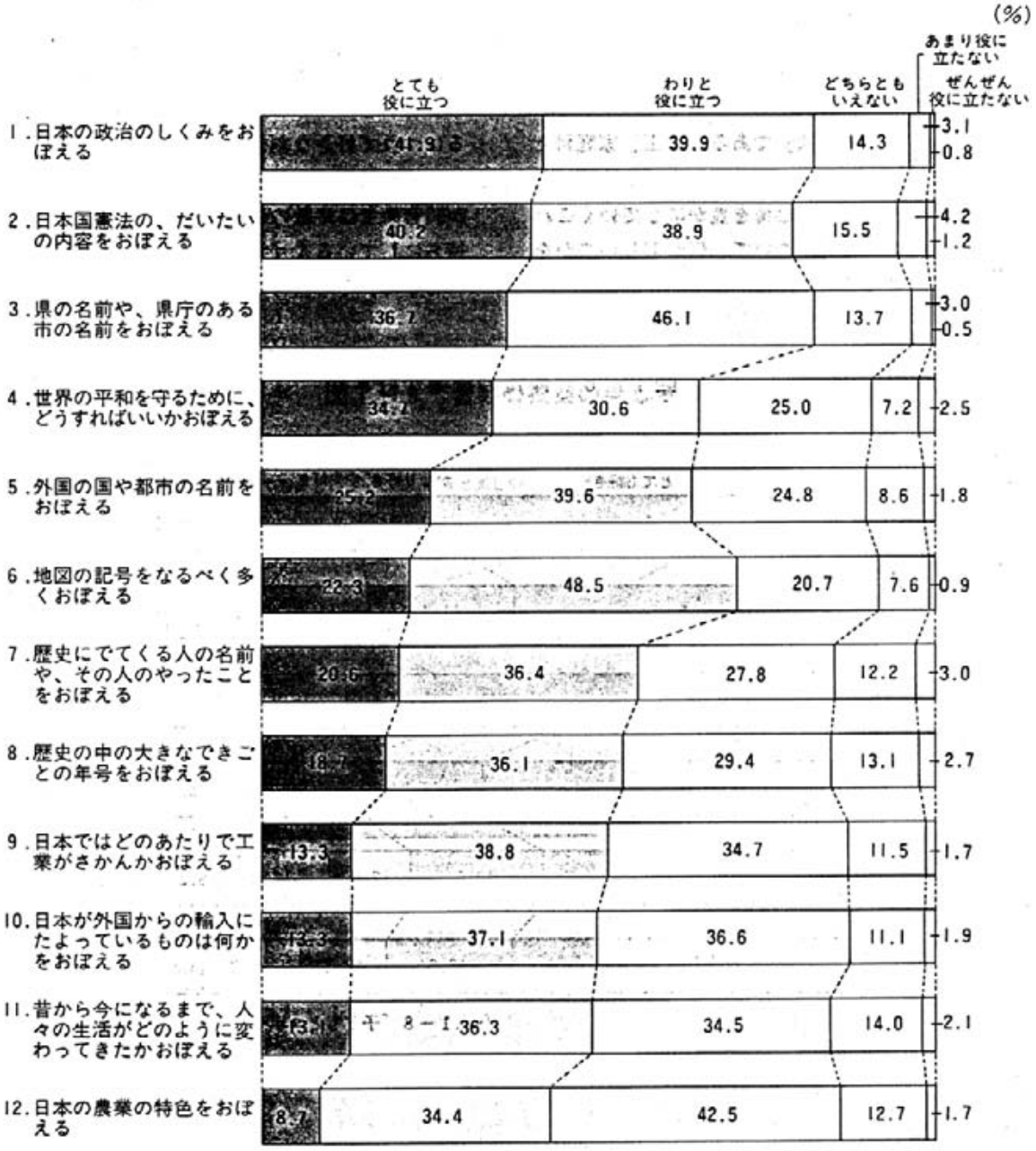


② 社会科が嫌いになった時期



(vol.5－6「教科(社会科)」より)

図1－7　社会科学習の有効性



(vol.5－6「教科(社会科)」より)

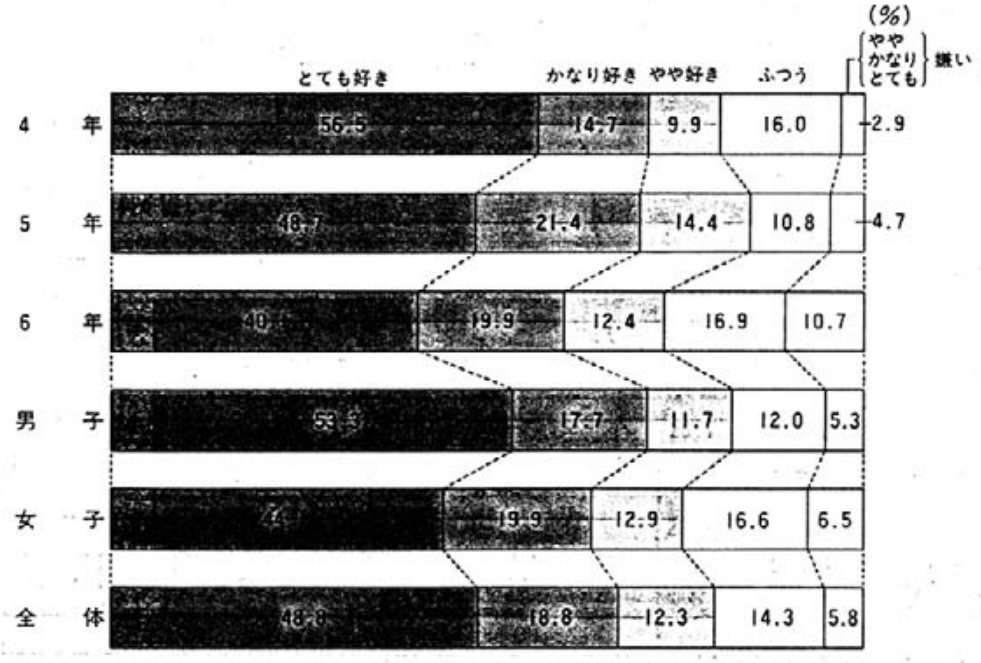
音楽、体育

教科の中でも主要4教科以外にスポットを当てたのが、vol.1－8「子どもとスポーツ」とvol.7－9「音楽」である。図工、家庭科と共に、子どもたちにとっては楽しい時間である。子どもたちの心情を豊かにしていくこれらの大切な教科について、何が楽しいのかを明らかにしていく。

図1－8と図1－9は、体育と音楽の授業の楽しさをたずねたものである。学年が上がるにつれて好きな割合が下がるのが気になるが、それにしても体育では4分の3の子どもが、音楽では半数の子どもが、この授業を心待ちにしているようすがよくわかる。

そして、その教科の中で、どんな場面が楽

図1－8　体育の授業が好きか

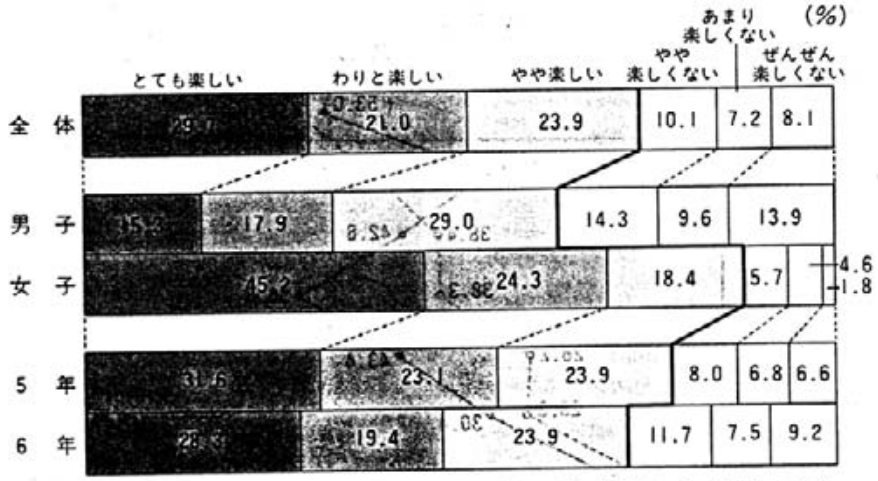


(vol.1－8「子どもとスポーツ」より)

しいかをたずねた図1－10と図1－11から、体育では、サッカー、ドッジボール、ポートボールなど、みんなが一緒にでき、活動性が高く、ゲーム的な要素の高いものを好み、音楽でも合唱、合奏など、みんなで一緒に表現できるものを楽しいとしている。さらに音楽では、レコード鑑賞のような、ゆったりとした時間も好まれている。

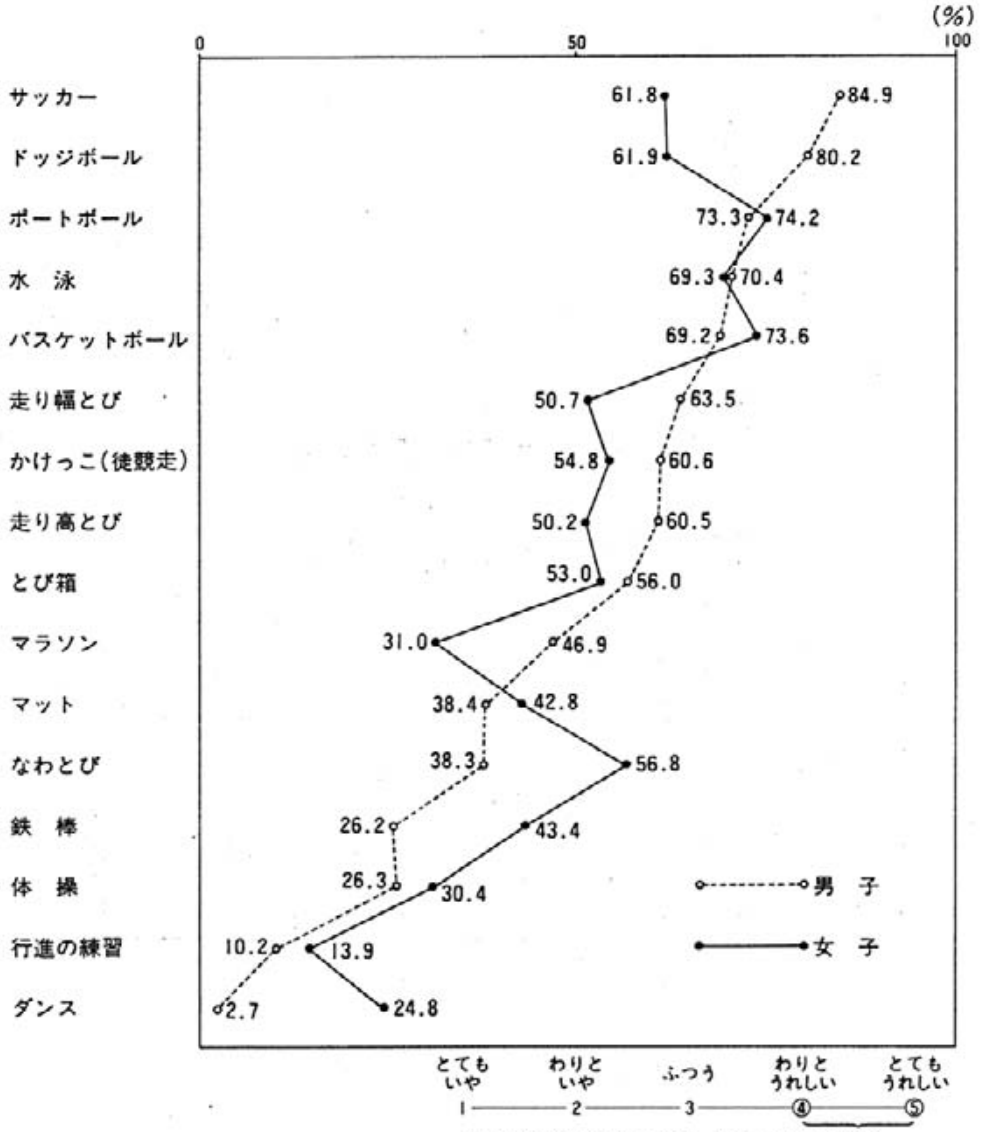
以上、いくつかの教科について子どもたちの意識を概観してきたが、毎日の生活時間の大半を費やす授業が、子どもたちにとって能動的に自らかかわれる楽しい時間であるにこしたことはない。しかし、主要教科と呼ばれる教科については、子どもたちが受け身であり、「できる」「できない」の意識が強いという問題点がみられる。教師は、授業をうける当事者ともいうべき子どもの声にもっと耳を傾け、子どもの知的好奇心をゆさぶり、子どもたちがのびのび学習できるように努力していく必要があると思われる。

図1－9　音楽の授業の楽しさ



(vol.7－9「音楽」より)

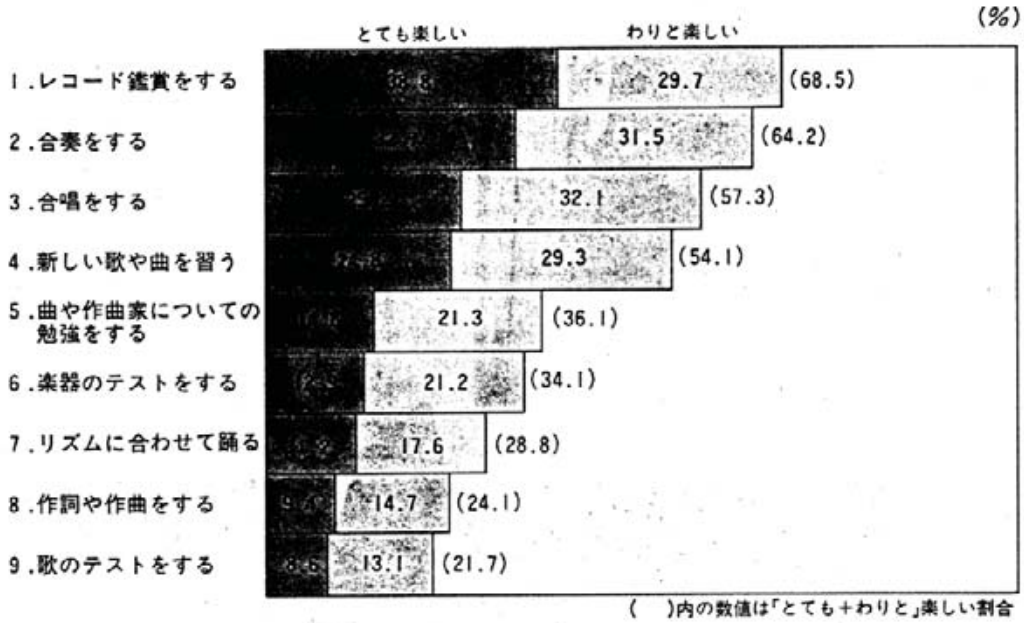
図1－10　好きな種目(性別)



※図中の数字は4と5のパーセントをたしたもの

(vol.1－8「子どもとスポーツ」より)

図1－11　楽しい音楽の授業



(　)内の数値は「とても＋わりと」楽しい割合

(vol.7－9「音楽」より)

2. 教室の雰囲気

学級にはそれぞれの雰囲気がある。暖かい感じの学級、とげとげした感じの学級……。そしてそこには、多くの友だちがいて、先生がいる。そこで子どもたちはたいてい2年間、同じ学級の中で毎日何時間かの生活を送る。

子どもにとって学級は、どんな意味をもつのであろうか。そこでの友だち関係については第3章の「子どもと人間関係」で検討を加えるとし、ここでは、学習活動の基礎となる学級に目を向け、子どもと教師とのかかわりを中心にみていく。

学級への満足度

vol.2－5では「子どもにとっての学級」と題して、11クラスを、さらに次年度21クラスをプラスして、1つ1つの学級に目を向けたケース研究が報告されている。表1－3はクラスへの充足感をたずねたものである。学級に対する気持ちは、学級により大きな開きがあり、A学級のように9割の子どもから支持されている学級もあれば、K学級のように支持率が2割の学級もある。それと同時にもうひとつ気がつくのは、学級に対する満足度が、基本的には担任に対する評価と密接に関連している事実である。つまり表中の数値が示すように、教師に対する評価のよい学級では、子どもたちの帰属意識が高まり、逆に教師への評価が低下するにつれ、学級への不満もつのるというパターンである。

表1－3　クラスへの充足感

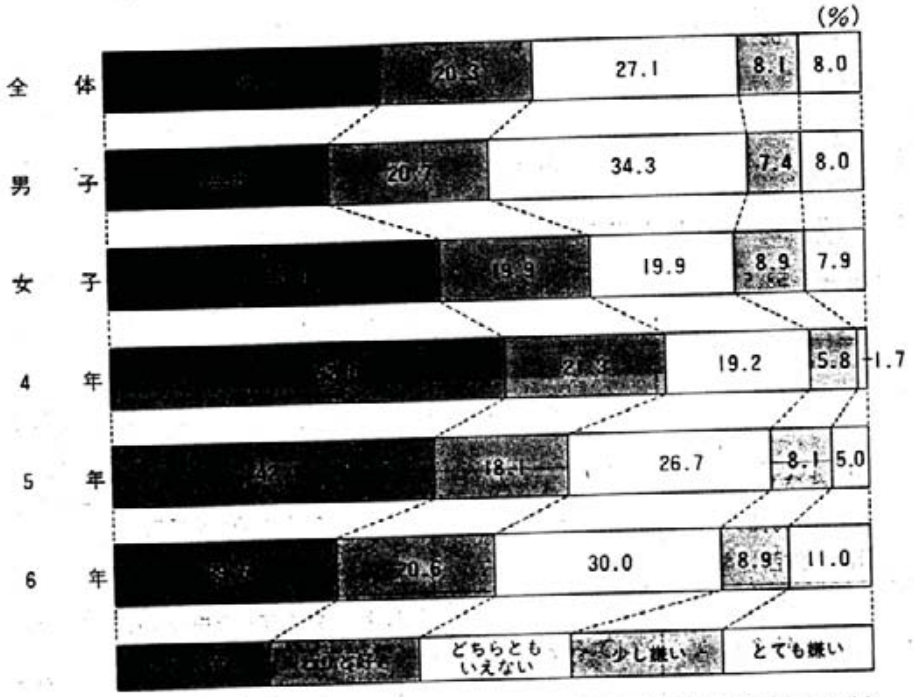
(%)

学級	今の担任になってよかったと思う（とても）	今の学級になってよかったと思う（とても）	学級担任について（教職年数・教科・学級経営の特徴など）
Ⓐ	85.7	88.4	25年 女 体育　生活指導のベテランで、態度や言葉づかいにとてもきびしい。自主学習を中心に、自ら学ぶ態度の育成をねらいとしている。
B	79.5	75.3	13年 女 特になし　どの教科も教科書にそって、ていねいに指導している。一人一人を大切にした学級経営。
Ⓒ	68.8	65.6	2年 男 体育　始業前、昼休みは必ず外に出て子どもと遊ぶ。「学級には常に笑いが必要」。
D	64.9	51.4	6年 男 算数　体力作りを一年の課題とし基本を大切にした学習。脱線授業も多く、明るいクラス。
E	58.5	65.9	1年 男 算数　体育の不得意な子の多いクラスなので、教師が外に出て遊ぶ機会を作ろうとしている。
F	53.8	46.2	20年 男 社会　きちんとした学習態度を身につけ、確実なものをつくり上げていく指導。宿題やテストも多く学習の定着に注意を払っている。
G	53.8	64.1	35年 女 国語　豊かな創造力をモットーに自ら学ぶ姿勢を育てている。子どもの要求はすべて受け入れる。
Ⓗ	40.9	59.1	12年 男 体育　体力作りを中心になんでもやってみようというファイトマン。子どもたちを叱咤激励して共に学習している。
I	38.5	43.6	8年 女 音楽　子どもに対してはやさしく、ていねいに指導している。歌や笛を演奏しているときは、クラスがひとつになっている。全体としてわがまま。
Ⓙ	34.9	49.5	30年 男 理科　子どもの中に一緒に入ることなく、常に教師と児童という距離をもって指導している。人情味ある叱り方をする。
Ⓚ	18.6	23.3	10年 女 社会　子どもの気持ちと遊離した形の叱り方をする。資料をもとに、自ら課題を発展させていく学習。

○は6年生　　（vol.2－5「子どもにとっての学級」より）

そこで、子どもたちはどんな教師を求めているのかをvol.3－9「子どもの求める教師像」をもとに探っていく。まず担任の先生が好きかをたずねてみた。ここでも調査した学級によりかなりの開きが認められるが、平均しておおまかにとらえてみると図1－12に示すように、クラスの3分の1は、担任の先生に積極的な好意を示している。一方、「とても嫌い」と反感をもっている子も1割近くいる。また「どちらともいえない」と態度を保留する者も約3割と、かなり高い数値を示している。全体的には、思っていた割には、先生は好かれていないという印象を受ける結果であった。そしてこの傾向は、女子より男子に、また学年が上がるにつれてより顕著になっていく。

図1－12　担任の先生が好きか

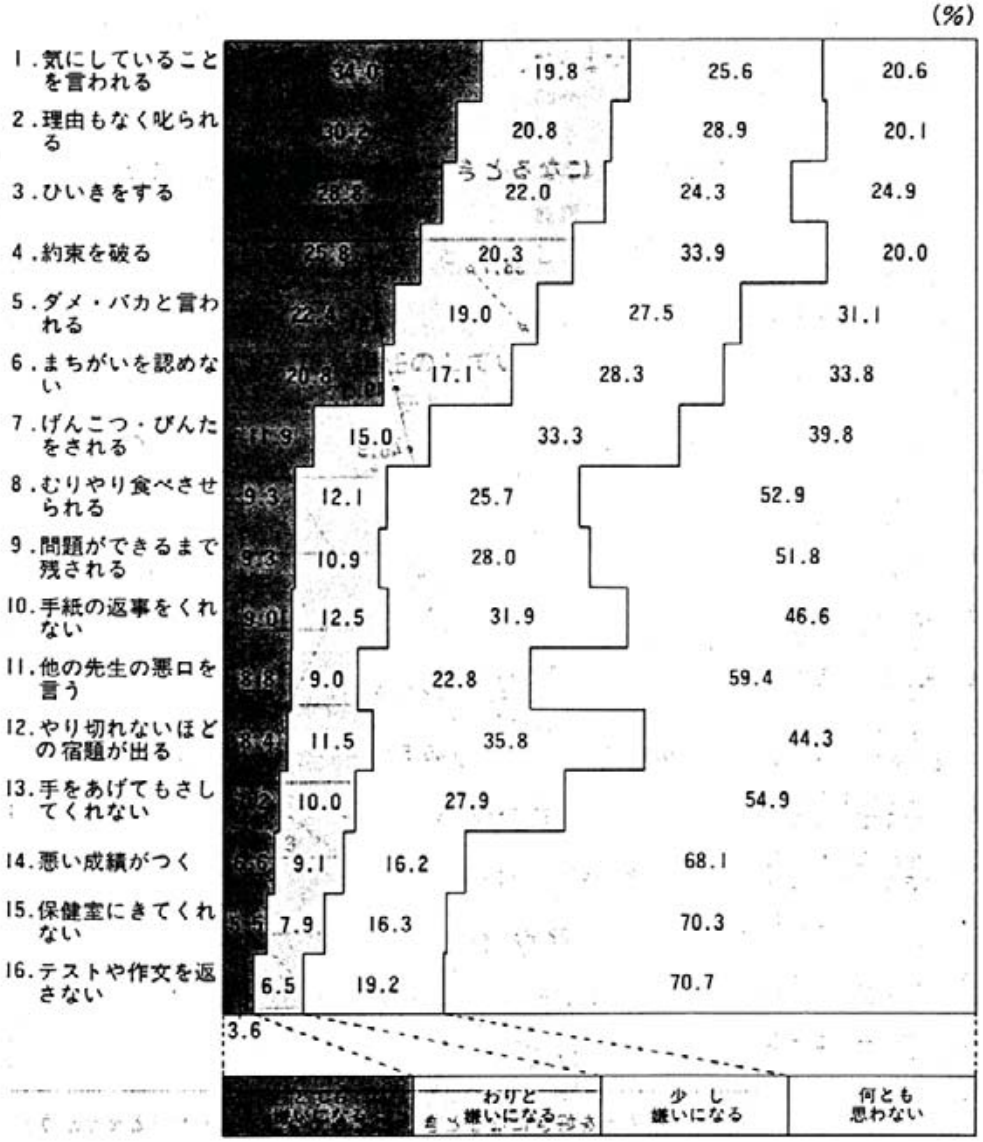


(vol.3－9「子どもの求める教師像」より)

子どもの求める教師

この担任教師に対する評価の低さを探るため図1－13ではどんなときに先生を嫌いになるかをたずねた。上位にきている項目は「気にしていることを言われた」「理由もなく叱

図1－13　先生を嫌いになるとき

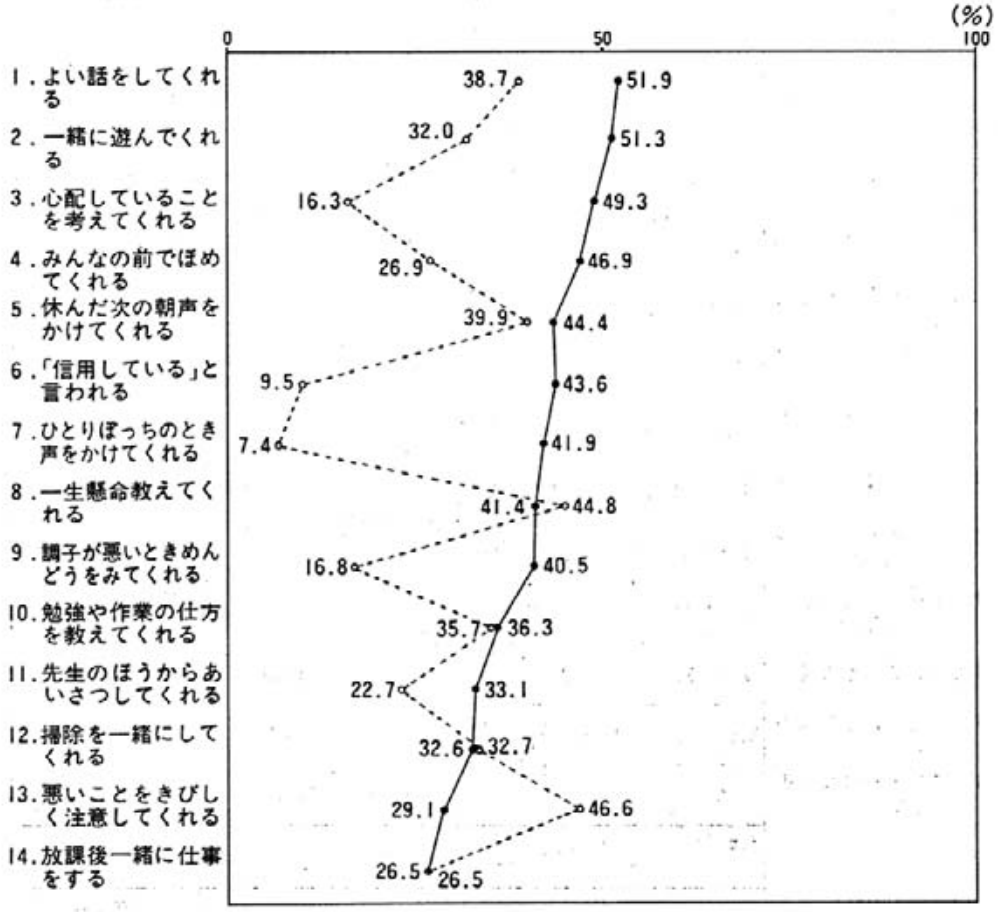


(vol.3－9「子どもの求める教師像」より)

られた」「ひいきした」ときであり、先生から認められないとき、または自分の中で納得できないときに、先生を嫌いになっていくようである。一方、「げんこつ・びんたをされる」「やり切れないほどの宿題が出る」など、自分にとっていやなことではあるが、先生が自分に対してかかわりをもってくれていると感じるのであろうか、そうしたときは先生を嫌いにはならないようである。

それでは、子どもが先生を好きになるときはどんなときなのか。図1－14に示すように、「よい話をしてくれる」とか「一緒に遊んでくれる」「心配してくれる」「ほめてくれる」が上位に並んでいる。しかし実際に先生からしてもらったことの1位は「きびしく注意してくれた」であり、また破線と実線の差、つまり現実と希望の差が大きく開いているものは「心配してくれる」「信用してくれる」「声をかけてくれる」である。これらの項目のギャップをうめる過程に、子どもたちとのコミュニケーションを深める糸口があるように思える。

図1－14　先生を好きになるときと先生にしてもらったこと



(vol.3－9「子どもの求める教師像」より)

教師の意見

それでは、教師自身は子どもたちとのかかわりをどう見ているのであろうか。vol.6－3「教師の生活と意見」では、全国の小学校の先生885名を対象として調査が行われた。

子どもの声と教師の自己評価とのズレをみたものが図1－15である。「誰か特定の子をひいきする」についてみてみると、

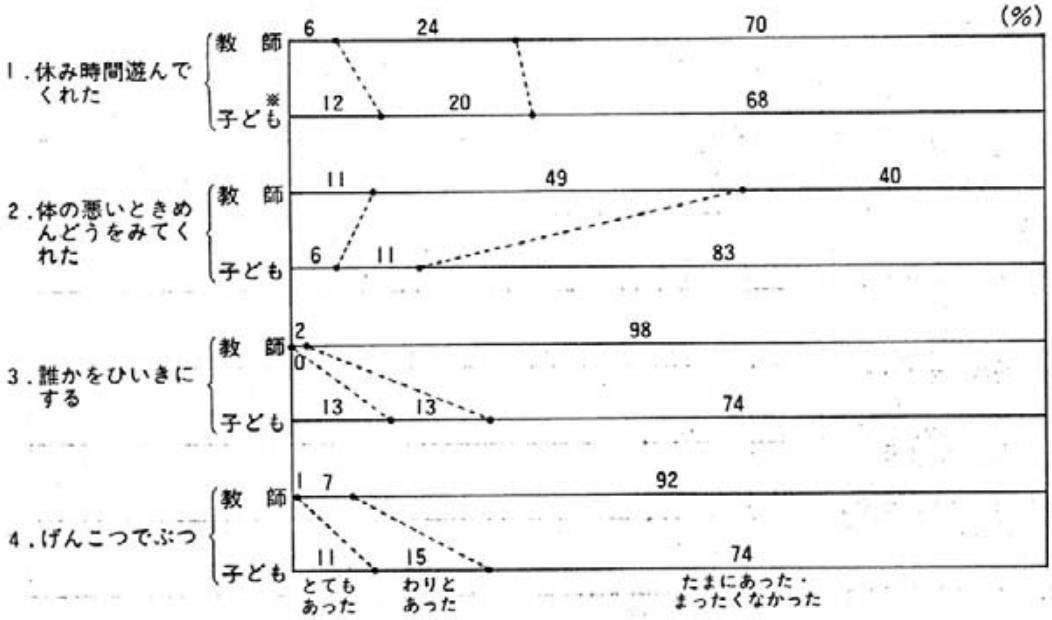
	教師	子ども
①とても・わりとあった	2％	<26％
②たまにあった	27％	29％
③まったくなかった	71％	>45％

となる。教師はいろいろしているつもりだという割に、そうした行為は子どもの心に届かず、それと同時に教師はしていないつもりでも教師からいやなことをされたと感じている子どもたちは多い。

これらは子どもたちとの接触の低さにあると思える。しかし図1－16のように、教師は「忙しすぎて、子どもと接する時間がない」を悩みの第1位にあげ、次いで「うまい授業ができない」が悩みの種だという。40人の子どもたちを相手に、熱心に授業をする。そして放課後、教材研究やら会議などに時間を費やし、長い時間の勤務を終えて帰宅する。そう

図1－15　担任のしていること

――子どもの見方とのズレが目につく――



（※『モノグラフ・小学生ナウ』vol.3－9より）

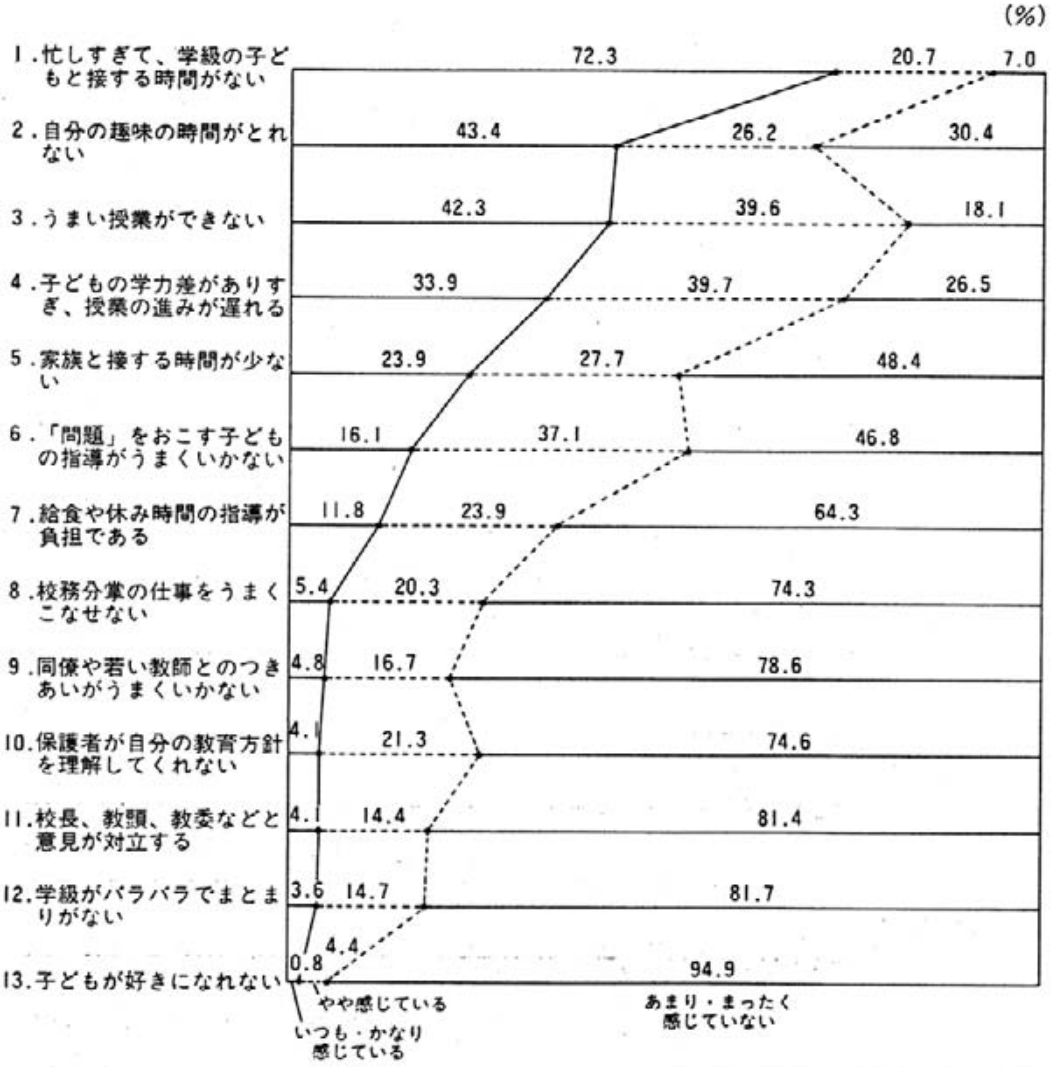
（vol.6－3「教師の生活と意見」より）

なると、授業についてはある程度までのことはできるが、子どもの相手になったり悩みを聞いてやったりする時間がとれないのであろう。

しかし、子どもたちの中に入っていこうとすれば、廊下ですれちがうときに声をかけたり、給食や休み時間にいろいろな話をするなど、方法はいくつも考えられる。そのような活動の中から両者の関係が広がり、深まっていく。そしてそれが、楽しい学級を作りだし、学習の効率をも高めていくと考えられる。

図1－16　教師の感じていること

――忙しすぎて、子どもと接する時間がとれない――



(vol.6－3「教師の生活と意見」より)

3. 帰宅後の学習

保護者会や面談の際、いつも親からたずねられることは家庭学習のことである。親も、担任も、そしてむろん子ども自身も少しでもよい成績をと願う。しかし、現実には40人の子どもがいれば、それぞれの到達度はそれぞれに違い、成績の開きはいつの間にか残念ながら大きく上下に広がってしまう。その成績の格差を少しでも縮めるためには家庭学習をがんばることが1つの解決の方法となるだろう。

ところが親や担任の願いに反して、子どもたちはなかなか思うようには取り組まず、家庭学習の取り組みの差は、成績の格差をさらに広げてしまっているのかもしれない。そしてさらに「第二の学校」として定着した学習塾の存在。子どもたちは学習塾で学力をつけ、学校では骨休めをしているのだとさえいわれる。帰宅後の学習のあり方は、子どもたちの放課後の生活を含めて大きな問題である。

『モノグラフ・小学生ナウ』でも、vol.1－1とvol.3－7で家庭学習を、またvol.4－8とvol.8－5で学習塾を、それぞれ2回ずつ調査している。

家庭学習

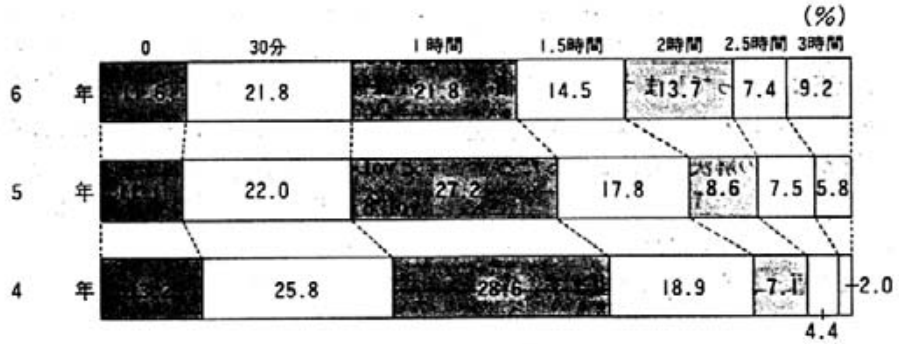
まず、塾のない平日に限って平均の勉強時間量をみたのが図１－17である。学年が上がるにしたがって家庭学習の時間が増していくが、30分以下の者は、ほとんど変化していない。つまり、学年が進むにつれて、全体がよく勉強するようになるというより、一部モーレツに勉強する層が分離していくといえよう。

それでは家ではどんな勉強をしているかというと、図１－18に示すように、漢字、計算の練習というようにドリル的なくり返しの勉強が中心である。なかなか課題をもって自分で学習することはむずかしいようである。自分で勉強しなければという気持ちと、何をやってよいかわからないという気持ちは、図１－19の宿題の希望にも表れている。子どもたちは、宿題は出されたくないであろうが、「ときどき出すくらいがよい」までを含めると77％に達する。もっとも土曜日は平日よりも少ない。宿題のない自由な週末をすごしたいのであろう。

続いて図１－20は、両親のかかわりである。勉強を「ほとんどみてもらわない」子は全体の２割と、親のかかわりの高さがみられる。しかし学年が上がるにつれて、徐々に親が手を退いていくようすもわかる。親のかわりに学習塾が登場するのであろうか。いずれにしても、勉強に関して親の意識の高さを表す結果である。

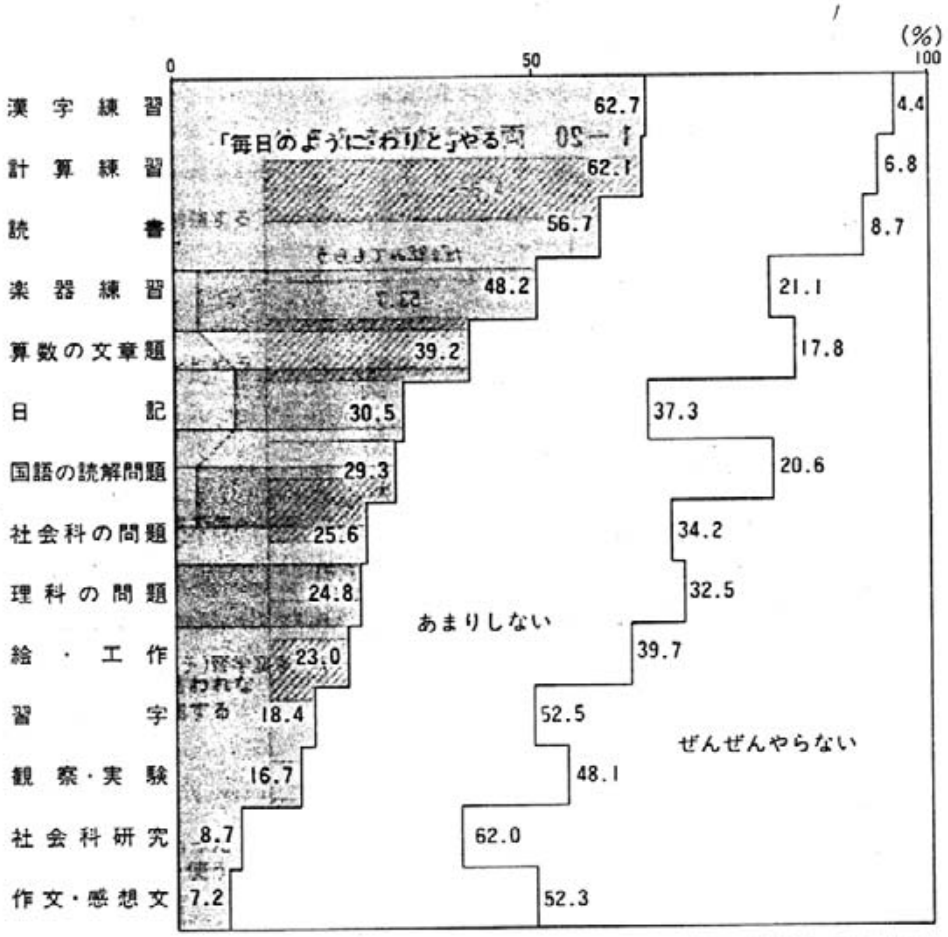
そして図１－21はさまざまな家庭学習の態度と、成績の関係をみたものである。図に明らかなように、すべての項目について、成績のよい子は悪い子どもより、より望ましい学習態度を確立している。とくに、「宿題がなくても、家で何かの勉強をする」子どもは前者が43％、後者が16％、「わからないときに参考書や辞書を使う」子どもが31％と12％、「勉強したことをノートにまとめる」子どもが25％と３％など、これらができるかどうかが、ある程度成績の良し悪しを左右していると考えてもよさそうである。

図１－17　平日の家庭学習時間



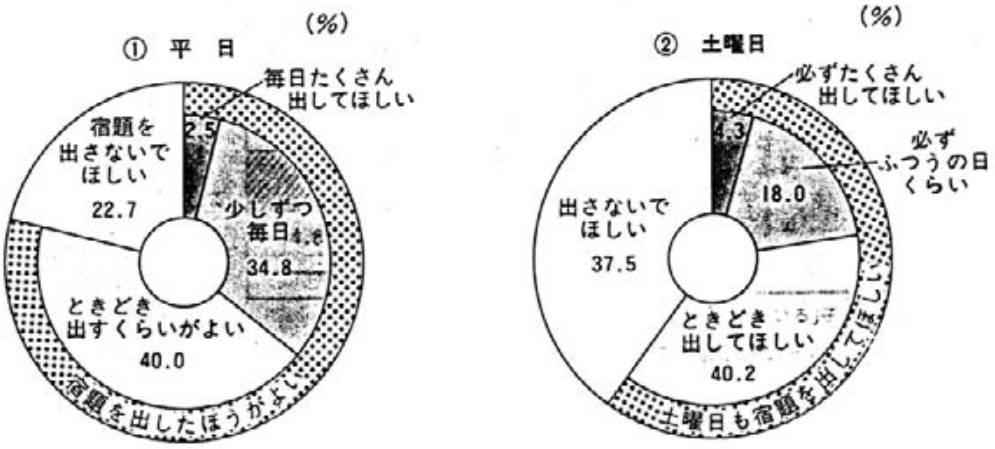
（vol.１－１「家庭学習について」より）

図1－18　家での勉強



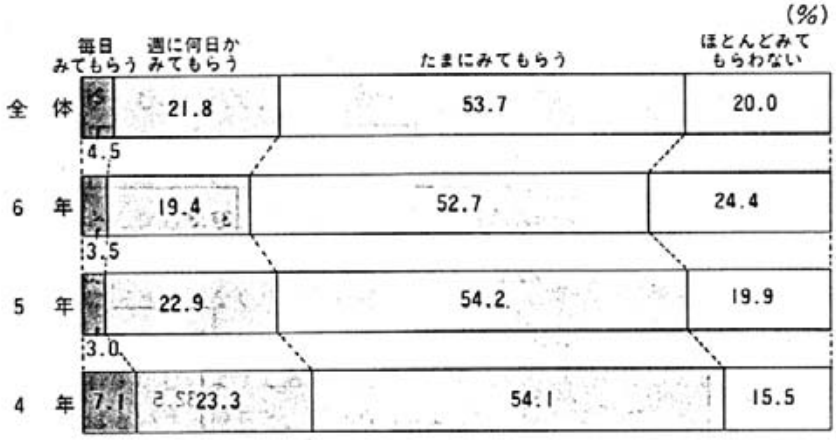
(vol.3－7「家庭学習(その2)」より)

図1－19　宿題の希望



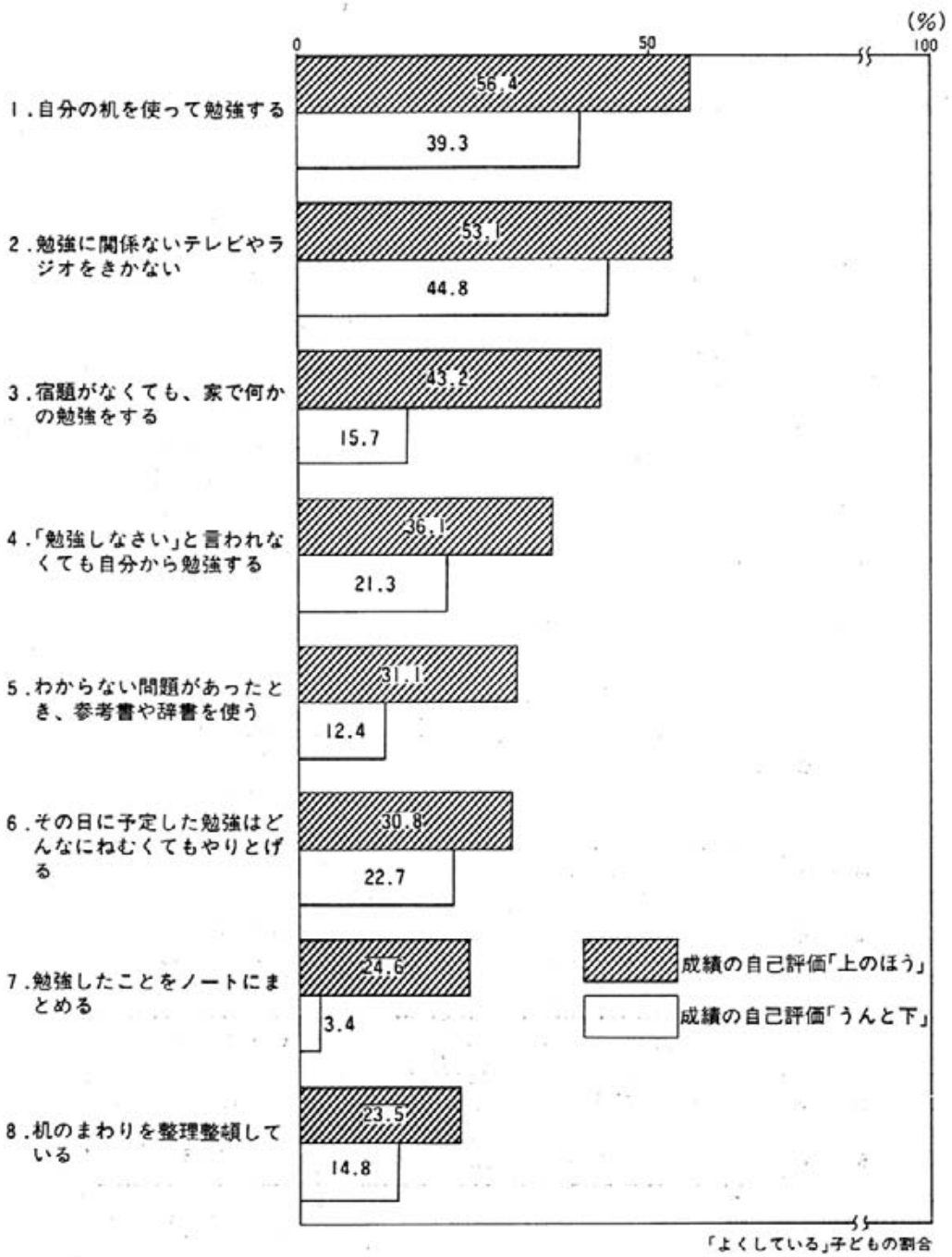
(vol.1－1「家庭学習について」より)

図1－20　両親は勉強をみるか



（vol.3－7「家庭学習（その2）」より）

図1－21　成績×学習態度



(vol.3－7「家庭学習(その2)」より)

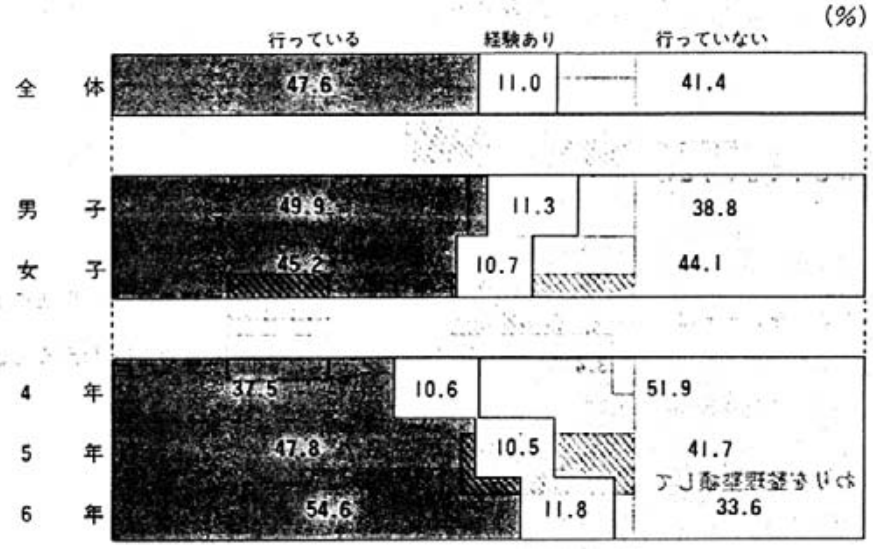
学習塾

学習塾へ通う子どもの姿は、すっかりなじみ深いものとなった。サンプル対象により異なるが、首都圏ではクラスの半数近くが通塾している。vol.4－8「学習塾」での調査では、全体の48%が塾通いをしており、6年生になると、塾体験のない子がわずか3分の1となる(図1－22)。なぜ塾に行くようになったかというと図1－23が示すように、「学力をつけるため」「将来のため」と本人の積極的な意志の表れがみられるが、第3位に「家の人に言われたから」がきており、親の影響力も無視できない結果である。

それでは子どもたちは、どんな気持ちで塾に行っているのであろうか。表1－4は、進学塾と補習塾について、その生活のようすをまとめたものである。両者とも4年生ごろから塾に行き出し、友だちも多く、楽しい塾での生活を送っているようすがみられる。しかし、とくに進学塾では、帰宅時刻が8時と、子どもの生活を乱していそうな気配がする。

それでは塾に通うようになって自分がどう変わったと思っているのであろうか。図1－24に示すように、まずトップに「勉強ができるようになった」があげられている。そして「勉強が好きになり（4位)」「発表力もついた(7位)」と、学力の向上を願って塾に行き、

図1－22　通塾の現状



(vol.4－8「学習塾」より)

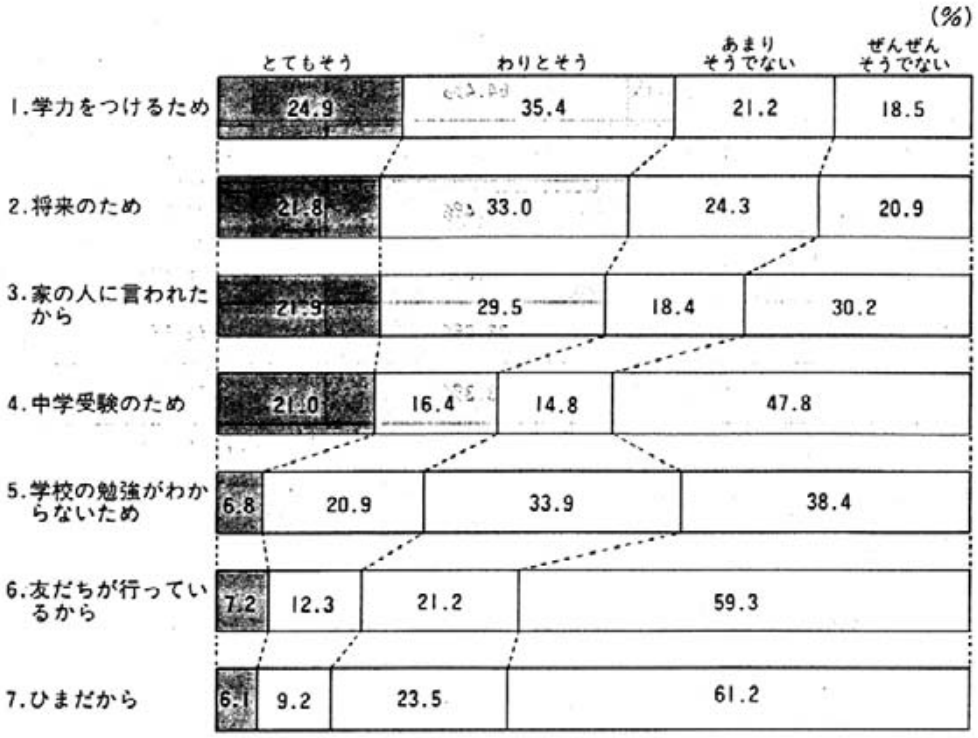
それが見事に達成されつつあると子どもは満足している。しかし一方で「遊び時間の減少」や、「友だちに負けまいと思うようになった」など、また割合は少ないが、「睡眠時間の減少」「手伝いをしなくなった」など、学力の伸びの中で失われていくものも、いくつか見られる。

次の図1－25は、学校と塾を比較したものである。塾に対して学校の評価はとても高く、ほとんどの項目で塾より上回っている。しかし、塾に行っている子の多くが、塾は学校より「一人一人ていねいに教えてくれ」「わかるまで教えてくれ」「テストの点が上がるようになる」と言っている。このことは今の学校の問題点を端的に表している結果であり、その部分に塾が入ってきて、補習塾では「一人一人、ていねいに、わかるまで」を、また進学塾では「テストの点を上げる」をキャッチフレーズにし、確実にそれを実現しているようすがうかがえる。

一方、学習塾だけでなく、スポーツ、音楽、そろばん、習字といったおけいこごとも盛んである。図1－26に示すように、「現在、行っている」子は3人に2人の割合である。これを学習塾に行っている子と合わせてみると、表1－5のように、両方通っている子と、両方とも行っていない子がおよそ4分の1ずつで、4割がおけいこごとに、残りの2割が学習塾だけに行っていることになる。忙しい子どもたちの放課後のようすがうかがえる。どんなおけいこごとを習っているのかについては、図1－27に示しておいた。

「よく学び、よく遊べ」の言葉通り、子どもにとって大切なのは遊びと学習であろう。帰宅後の学習について、家庭学習は大切に思える。子どもたちの学習習慣をつける意味か

図1－23　学習塾に行くようになった理由



(vol.4－8「学習塾」より)

らも、学力の定着をはかる意味からも。

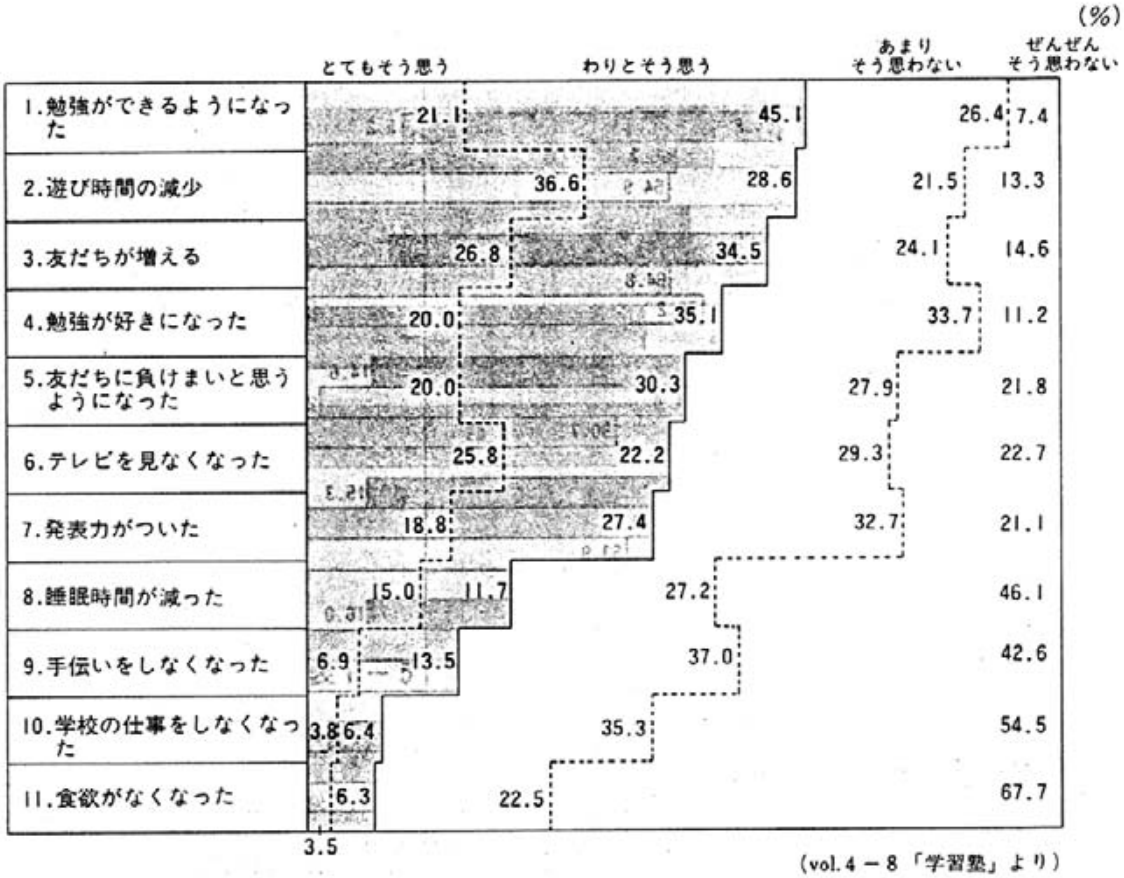
しかし学習塾については、子どもにとって一番大切な放課後の時間をうばいとってしまうところが問題である。そしてそれは、遊び仲間の喪失を生み、子どもの成長に歪みを生じさせる。塾通いについては、子どもたちの成長を、長期的な視野の中でとらえて考えていかなければならない問題である。

表1－4　塾での生活

		進学塾	補習塾
1．通塾平均日数（1週間につき）		3.38日	2.57日
2．平均勉強時間		2.98時間	2.09時間
3．何年生から（平均）		3.83年生	3.49年生
4．家から塾まで		家の近く　(48.6%) バス・電車をつかう(48.9%)	家の近く(85.8%)
5．夕食（家族一緒に食べる）		71.3%	83.9%
6．帰宅時間（平均）		8時	6時30分
7．勉強している教科	算数	92.9%	91.9%
	国語	89.3%	71.4%
	理科	66.8%	27.9%
	社会	64.4%	27.6%
8．塾の友だち		わりと多くいる	まあまあいる
9．塾は楽しい（とても楽しい＋わりと楽しい）		79.4%	74.8%
10．学年	4年生	10.5%	56.6%
	5年生	36.6%	42.5%
	6年生	48.3%	32.9%

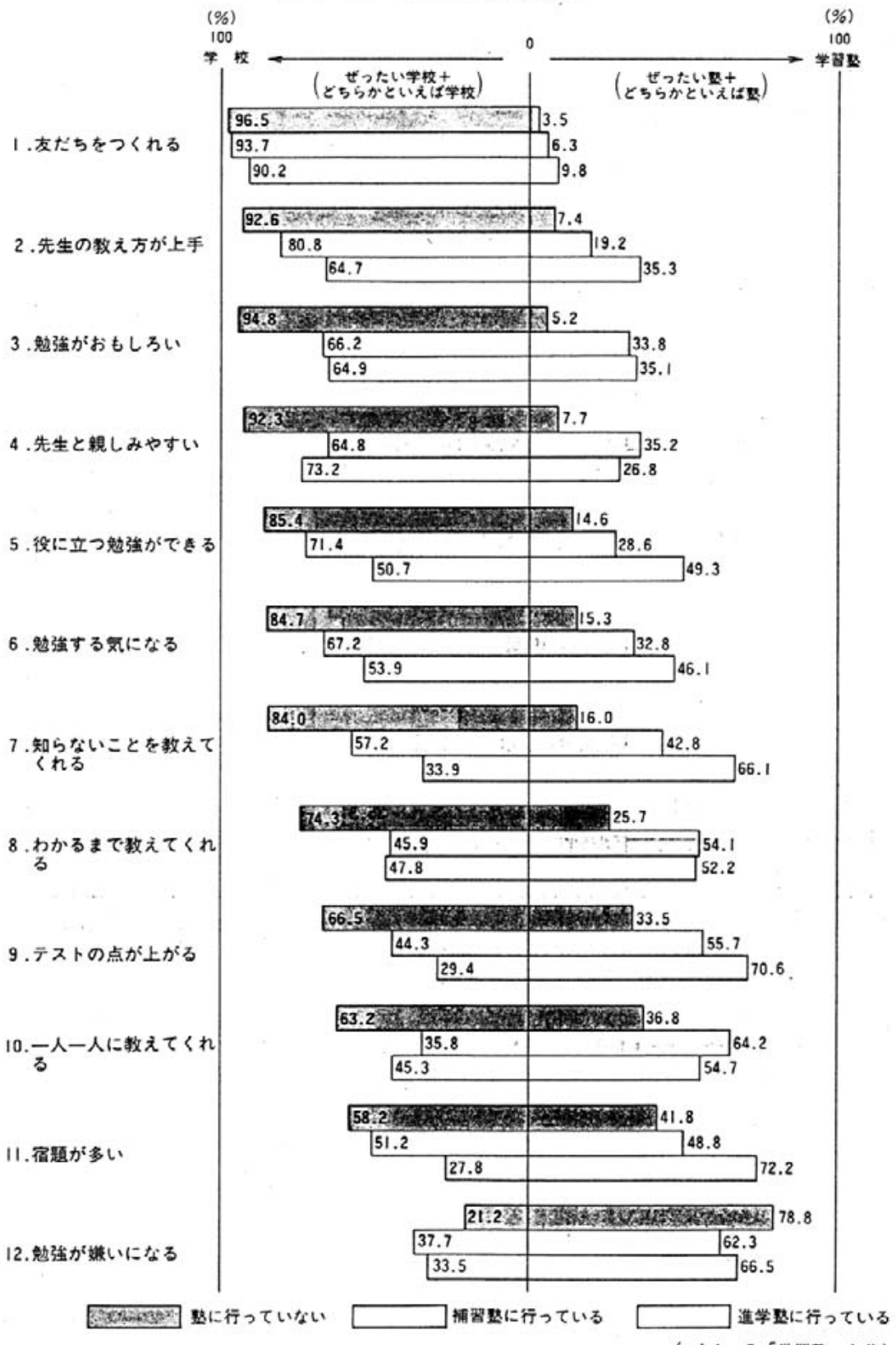
（vol.4－8「学習塾」より）

図1－24　通塾のおよぼす影響



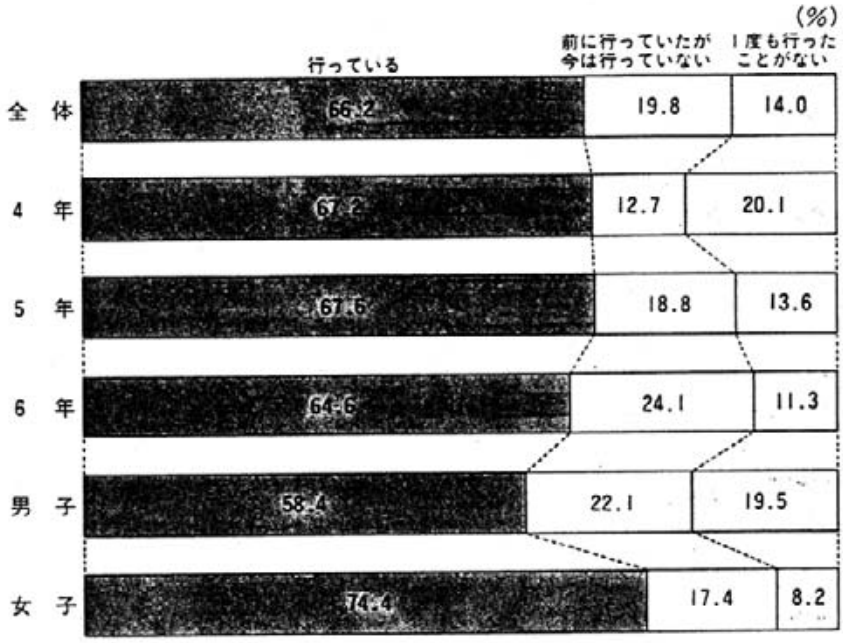
(vol.4－8「学習塾」より)

図1－25　学校と塾との比較



(vol.4－8「学習塾」より)

図1－26　おけいこごと通い



(vol.8－5「学習塾」より)

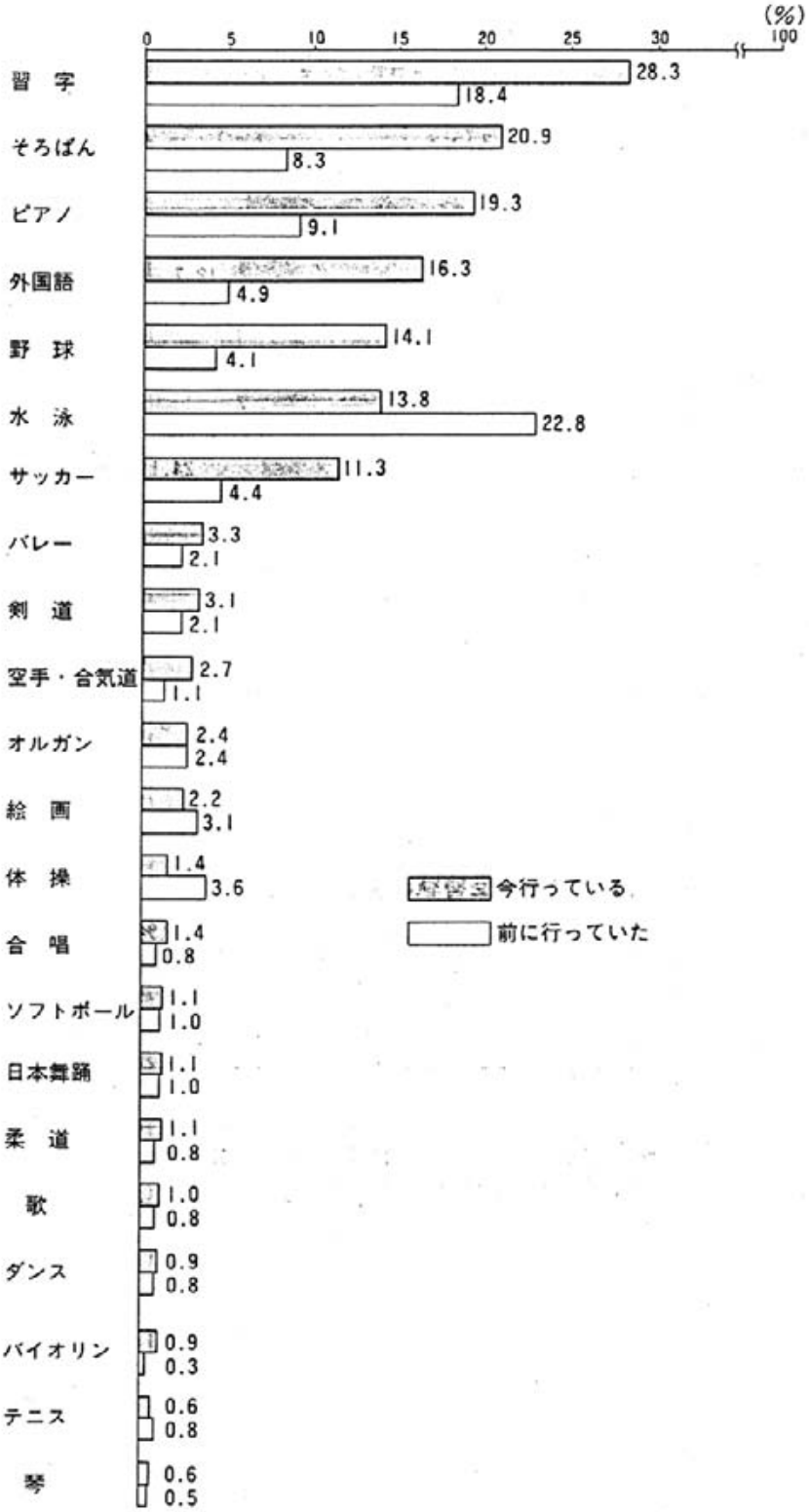
表1－5　学習塾×おけいこごと通い

(%)

		おけいこごと	
		行っている	行っていない
学習塾	行っている	26.7	18.6
	行っていない	39.4	25.3

(vol.8－5「学習塾」より)

図1－27　おけいこごとの種類



(vol.8－5「学習塾」より)

4. 学業成績のもつ意味

勉強の得意・不得意は、遊びがうまい・へた、スポーツが得意・苦手、リーダーシップのあり・なし、などと同じように、子どもにとって1つの属性であろう。

しかしどうしたことか、このごろの子どもたちは成績の良し悪しにこだわりをみせ、成績が自己評価のすべてというような考え方をしている。そこで本章のまとめとして、vol. 3－3「学業成績」をもとにしながら、学業成績の良し悪しを子どもたちがどのように考え、なぜあれほどまでのこだわりをみせるのかを探っていきたい。

得意・不得意

子どもたちは、どの程度授業を理解しているのかを**表1－6**に示した。半分近くの子どもが「わかる」と答えているが、「わからないときもある」「半分半分」と、自信のない子どもたちも約半数いる。それでは子どもたちは、そのような開きがどこから生ずると思っているのであろうか。**図1－28**は、子どもたちに勉強が「得意な子」と「苦手な子」を想定させ、その子どもが「どんな子なのか」を考えさせた結果である。図が示すように、子どもたちは、成績は学習努力を反映すると考えている結果である。したがって、

「勉強の得意な子」＝まじめな努力家

「勉強の苦手な子」＝勉強を怠けている子

という見方が定着している。これは、算数の成績のよい人と苦手な自分自身を比較した図

1－29からも明らかであり、算数が得意な人は、自分に比べて「がんばりぬく力」が強く、「まじめに勉強している」と考えていることがわかる。

それだけに図1－30に示す通り、苦手な子も努力さえすればできるようになると答えている。つまり、現状の自分は努力不足であり、がんばりさえすればできるようになると考えているのである。しかし現実は、そのがんばりができるかどうかである。

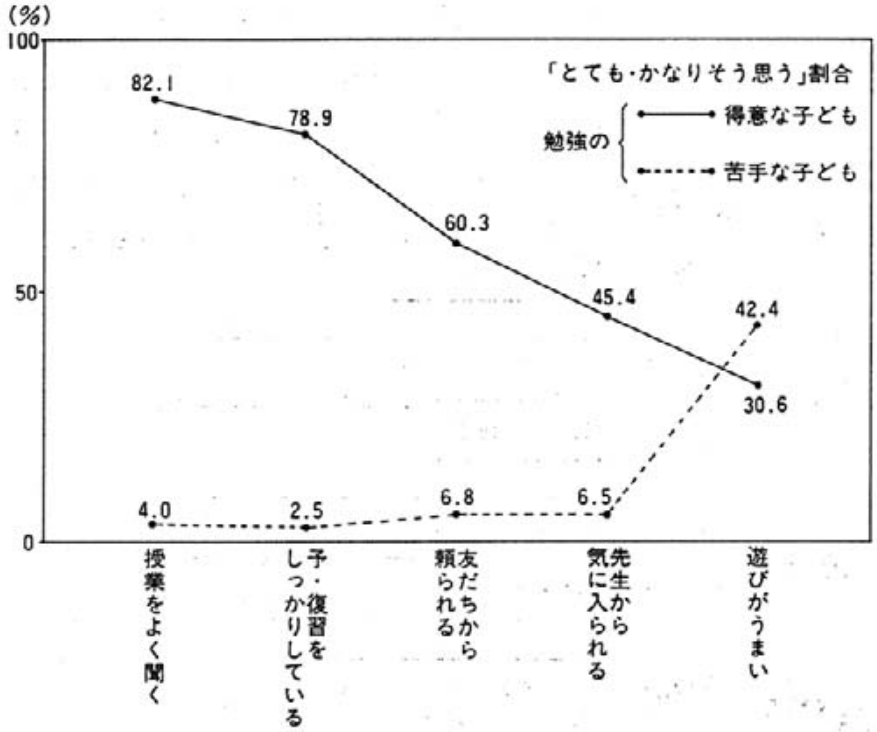
表1－6　授業がわかるか

(%)

		わかる			どちらともいえない			わからない		
		全部	ほとんど	小計	わからないときも	半分半分	小計	ほとんど	ぜんぜん	小計
国語	5年	13.8	36.6	50.4	28.6	19.2	47.8	1.2	0.6	1.8
	6年	13.1	32.0	45.1	31.1	21.3	52.4	2.2	0.3	2.5
	計	13.5	34.6	48.1	29.7	20.1	49.8	1.6	0.5	2.1
算数	5年	21.4	30.9	52.3	28.6	15.6	44.2	2.9	0.6	3.5
	6年	16.5	26.5	43.0	29.1	22.8	51.9	4.4	0.7	5.1
	計	19.4	29.1	48.5	28.8	18.6	47.4	3.5	0.6	4.1
理科	5年	18.7	39.7	58.4	27.3	12.0	39.3	1.3	1.0	2.3
	6年	16.0	37.0	53.0	25.6	19.1	44.7	2.0	0.3	2.3
	計	17.6	38.5	56.1	26.6	15.0	41.6	1.6	0.7	2.3
社会	5年	13.1	27.6	40.7	29.5	21.9	51.4	6.3	1.6	7.9
	6年	14.7	29.9	44.6	24.4	22.2	46.6	7.4	1.4	8.8
	計	13.8	28.6	42.4	27.3	22.0	49.3	6.8	1.5	8.3

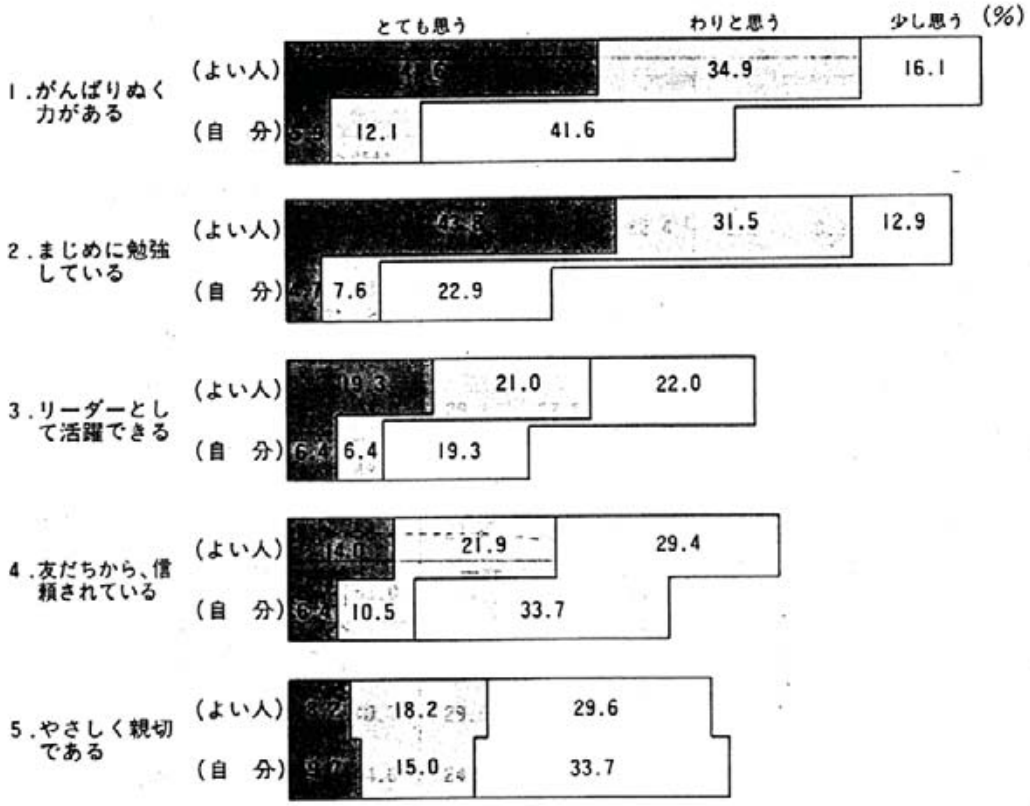
(vol.3－3「学業成績」より)

図1－28　勉強の得意な子ども・苦手な子ども



(vol.3－3「学業成績」より)

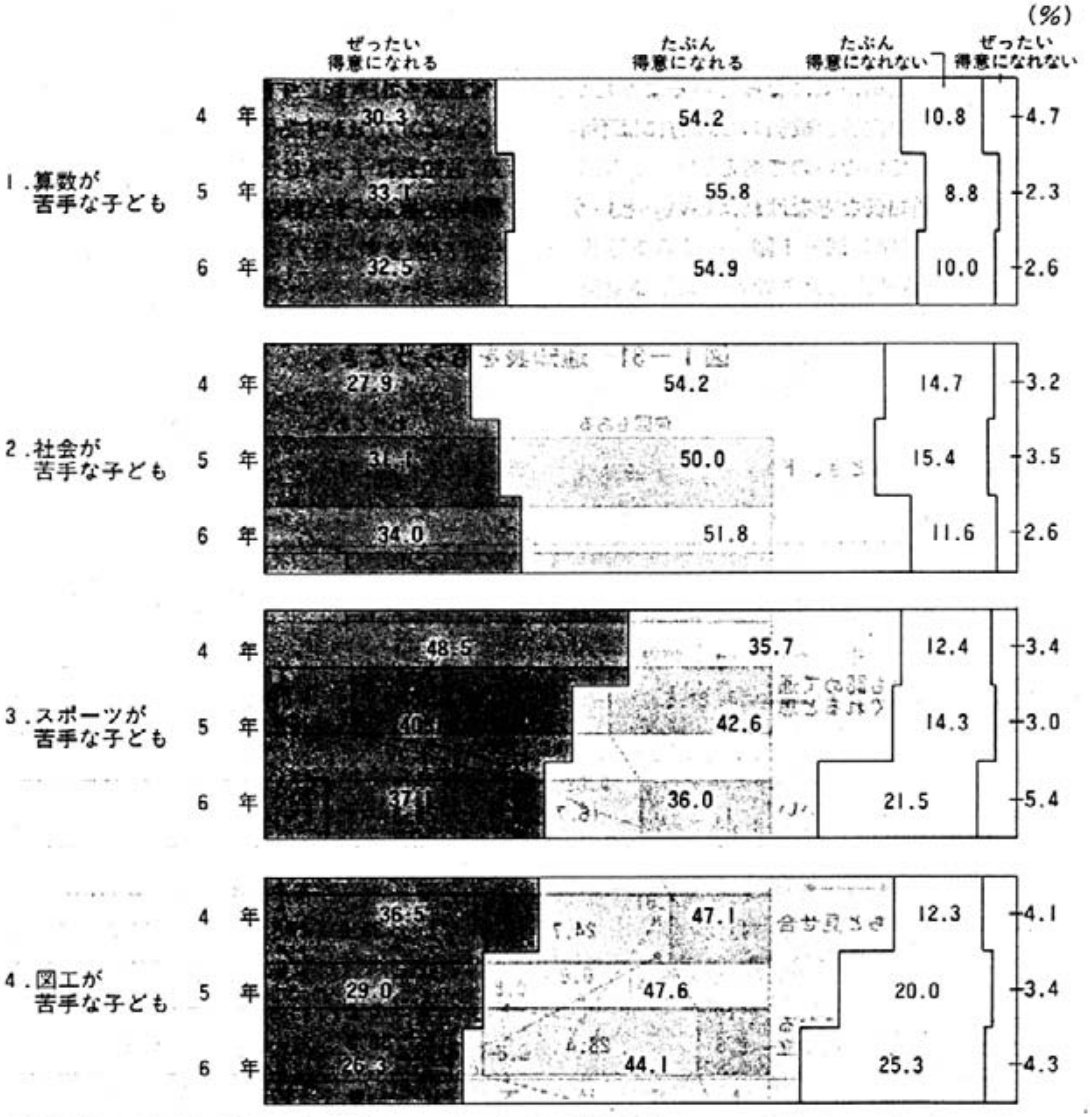
図1－29　成績のよい人と苦手な自分自身との比較



＊算数が苦手とする子どもたちの考え

(vol.5－11「教科(算数)」より)

図1－30　回復期待(努力次第で得意になれるか)



(vol.1－8「子どもとスポーツ」より)

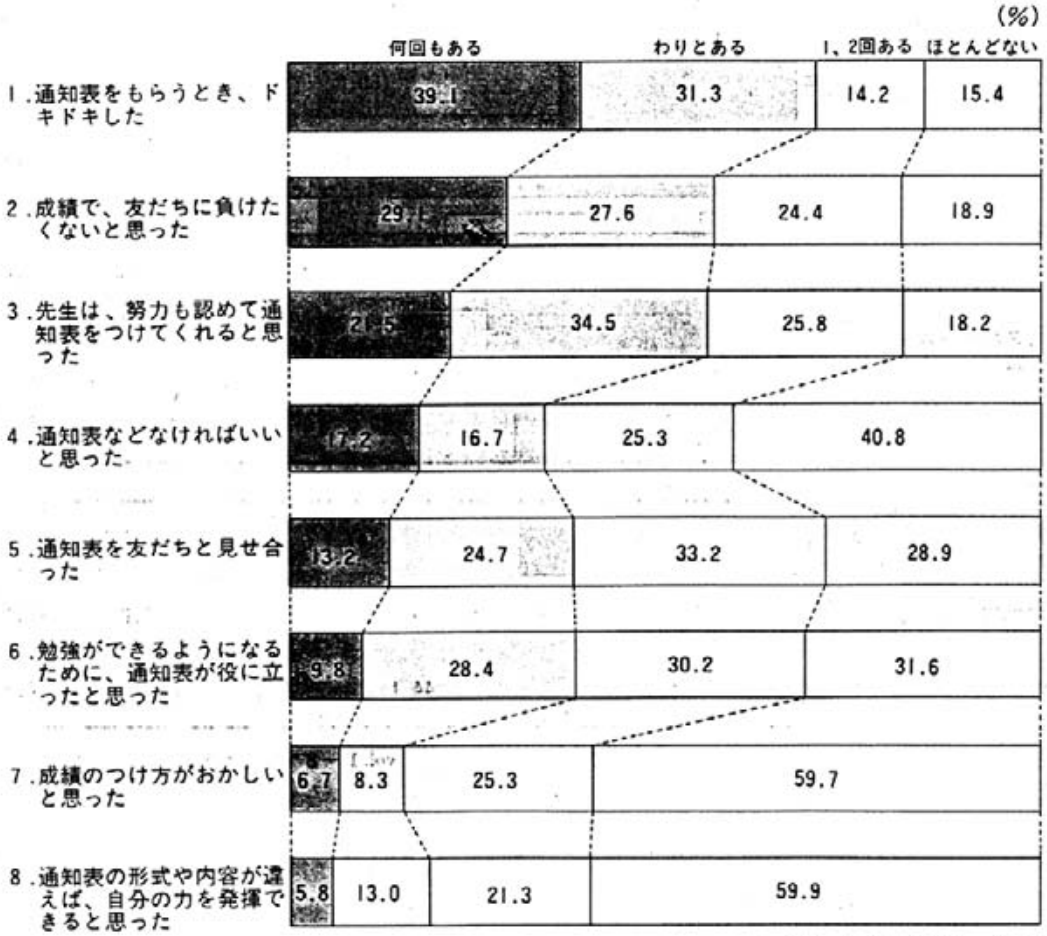
通知表

そんな子どもたちの努力をかきたて、はげみをもたせようとするものに、学期末に渡される通知表がある。図１－31は、通知表をもらうときの子どもたちの気持ちである。子どもたちの多くは、通知表への関心が強く、友だちと自分の成績が気になっているようだが、通知表の形式や内容、成績のつけ方には不満や疑問をもっていないのである。

しかし「通知表などなければいい」という子が「わりとある」までを含めると34％と、３人に１人いるという結果は見逃せないことである。また「勉強ができるようになるために、通知表が役に立った」こともあまりないようである。どうも通知表が本来の子どもの学習意欲を引き起こす役割をあまり果たしていないような気がする。

通知表は子どもをよりよく育てるための、学校と家庭を結ぶ大事なかけ橋の役目を果た

図１－31　通知表をもらうとき



(vol.7－7「通知表１」より)

しており、また学校にとっては、教育方針ともかかわり、かなり白熱した論議をよびおこすものである。とりわけ今は、一人一人を伸ばすこと、形成的評価のかかわりの中で、通知表の見直しの声も高まっている。そこでvol.7－8「通知表2」では、全国各地の特色ある通知表が紹介されている。参考にされたい。

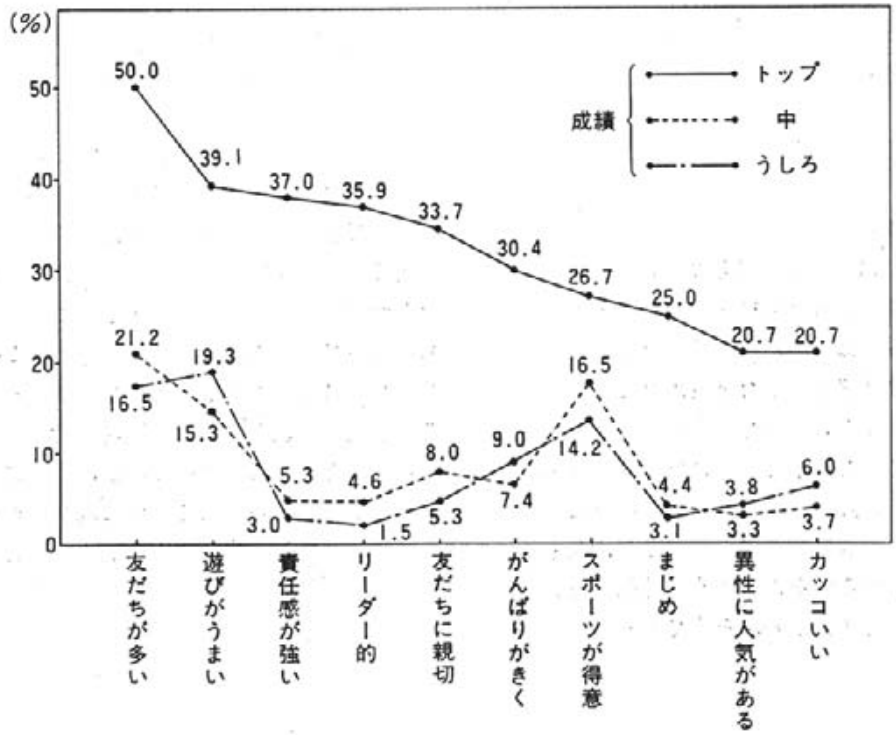
成績と自己像

図1－32は、自己像と成績との関連を示している。勉強の得意な子どもたちは、まじめでがんばりがきくということだけでなく、「友だちが多い」「遊びがうまい」「友だちに親切」など、勉強や学習態度などとの関連の薄い領域についても、明るい自己像を抱いている。

つまり、勉強の得意な子は、遊びから、友だち、勉強まで、すべての面で自分に自信をもつのが目につく。しかし中位から下位にかけては、自分に自信をもてないという意味で、図のように共通のプロフィールを示している。

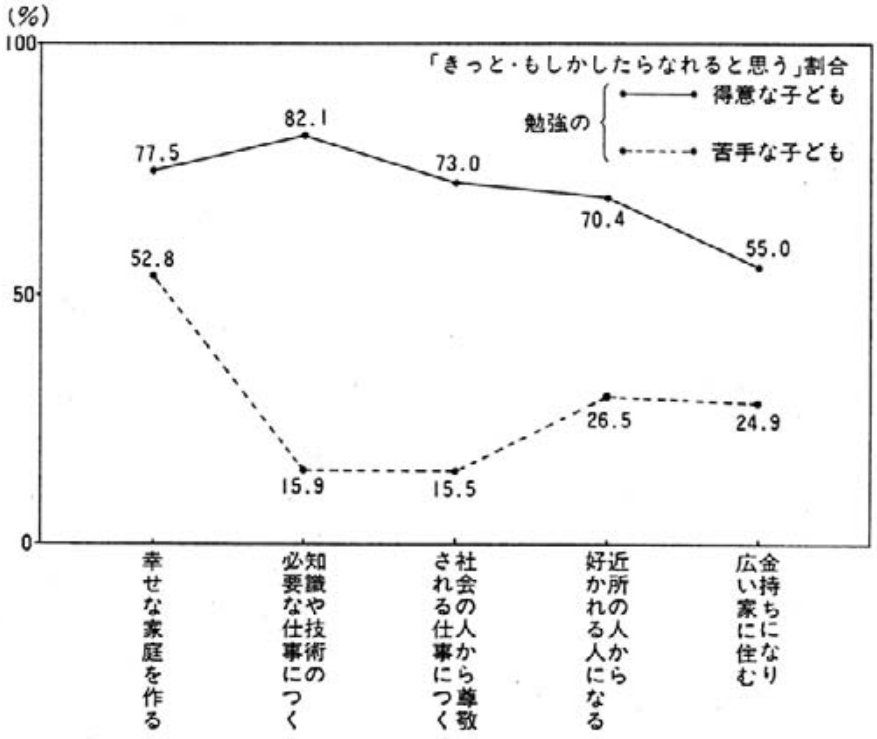
しかも成績と自己像の関連は、現在だけにとどまらない。図1－33に示す通り、勉強の得意な子は「尊敬され、人から好かれ、幸せな生活」を、一方、苦手な子は「社会に出ても

図1－32　自己評価×成績



(vol.3－3「学業成績」より)

図1－33　勉強の得意な子ども・苦手な子どもの未来



(vol.3－3「学業成績」より)

成功できず、幸せな家庭も作りにくい」という。

子どもたちの意識は、なぜこうまで「できる」「できない」にかたよってしまうのだろうか。それは、親も、教師も結果だけで子どもをみているからではないだろうか。そして勉強ができないのは努力不足だと責めたてる。

授業中いくらいい発想があったり、いい考えを持っていたとしても、最終的にはテストで100点をとらねばならない。記憶の量だけで子どもたちの成績がつけられ、それに親も子も一喜一憂する。そんなふうに勉強と毎日かかわっている子はかわいそうである。

本来、教育というのは、到達までの過程で語られなければならないであろう。学習過程において、子どもたちの中に論理的に物事を考える力、物事を創り出す力、心情豊かな心などが育っていく。それが子どもにとって将来、生きて働く力となるのである。ところが、結果だけにふりまわされてしまっているところに、現在の教育の大きな問題があると思われる。子どもたちが自由にのびのびと自分の頭を働かせ、自ら進んで学習に取り組めるような学習形態の、学習過程の改善が必要とされる。